

令和七年度

青少年健全育成作文

# 優秀作品集

墨田区

墨田区教育委員会

## まえがき

青少年が地域社会の一員として多様な人々と関わり、互いに支え合いながら安心して生活できる環境をつくることは、青少年の健全育成及び非行防止を進める上で重要な課題です。社会の変化が加速する中、青少年の意識や価値観、生活を取り巻く環境も大きく変わっています。こうした変化を大人が正しく理解し、世代を超えて対話を重ね、互いに歩み寄っていくことが、よりよい地域社会の基盤となります。

青少年健全育成作文コンクールは、大人が青少年の思いや考えに触れ、理解を深める機会とすることを目的に、毎年実施しているものです。今年度は、「家庭・学校・地域などの生活の中で『人と人とのつながり』について感じていることや考えていること」をテーマに作文を募集しました。寄せられた作品には、日々の体験を通して得た気づきや葛藤、感謝や決意などが率直な言葉で表現されており、一人ひとりの心豊かな感性が伝わる、たいへん意義深い内容でした。

今年度のコンクールには、小・中学校合わせて【4493編】の応募をいただき、厳正な審査の結果、【178名】が入賞となりました。本書では、入賞作品のうち最優秀賞及び優秀賞の【42編】を収録しております。青少年健全育成活動を推進される皆様にとって、青少年理解を深める一助として御活用いただければ幸いです。

結びに、本コンクールに応募してくださった児童・生徒の皆様をはじめ、作品の取りまとめや審査に御協力いただいた小・中学校の教員の皆様、関係団体の代表者の皆様に、心から感謝申し上げます。

令和八年三月

墨田区

墨田区教育委員会

# 目次

## 最優秀賞

### ○小学校の部

わたしとママのないしよのじかん	中和小学校	一年	大堀 麦	1
ながなわの思い出	第二寺島小学校	二年	大野 泰知	1
大好きなお父さん	第二吾嬬小学校	三年	熊谷 幸美	2
心に虹をかけよう	第二寺島小学校	四年	田中 善	3
話せなかった自分	曳舟小学校	五年	市之瀬 光里	4
盆踊りから始まる人とのふれあい	両国小学校	六年	原 愛莉	5

### ○中学校の部

楽しいお祭りの思い出	豎川中学校	一年	新里 紗英	7
今より明るい世界を	寺島中学校	二年	福井 瑠莉	8
あの子の勇気を受けとって	桜堤中学校	三年	金田 梨希	9

優秀賞

○小学校一年生の部

えがおつながるぼんおどり	両国小学校	小川 希乃香	11
おにいちゃんはライバル	第三寺島小学校	岡田 泰輔	12
たくさんのありがとう	曳舟小学校	成田 詩絵	13
わたしのかぞく	東吾嬬小学校	藤井 翼咲	13

○小学校二年生の部

大切なおはよう	言問小学校	永島 政高	15
大すきなTボールと子ども会のなかま	両国小学校	上田 淳平	16
やっぱり四人家ぞくがいいね	押上小学校	菅原 奈乃羽	16
あいさつはたいせつ	八広小学校	平山 波麗	18

○小学校三年生の部

ひいばあばにありがとう	緑小学校	倉本小遥	19
いつものおじさん	二葉小学校	岩本望七	20
あーちゃんとママは、いっしょいっしょ	中和小学校	鈴木彩乃	21
パパとのやくそく	梅若小学校	松野蒼音	22

○小学校四年生の部

人とのつながり	業平小学校	篠田悠	24
おじいちゃんとの日々	両国小学校	海老根みのり	25
大切な人がいるからこそ	第二寺島小学校	渡邊ひまり	26
手話で仲よく	曳舟小学校	伊東郁香	27

○小学校五年生の部

野球から学んだこと	外手小学校	小林佳維人	28
ライバルのタケル	両国小学校	赤津虎之介	29
ぼくとぼくと空手道	第四吾孺小学校	鶴見圭梧	30
人と人のお礼の言葉	第二寺島小学校	亀田昌宗	31

○小学校六年生の部

最高の仲間と最高の思い出	緑小学校	出牛夏子	33
本当の思いやりとは	第一寺島小学校	塩山叶蓮	34
伝統をつなぐ人と人のつながり	第二寺島小学校	根布谷 諒	35
祖母から学んだ大切なこと	八広小学校	山口千遥	36

○中学校一年生の部

つなぐれ！優しさのバトン	両国中学校	宮本 隆之介	38
ご年配の方に教わった大切なこと	錦糸中学校	田中 陽介	39
家族の支え	文花中学校	田崎 七菜	40

○中学校二年生の部

初めの一步は笑顔から	両国中学校	藤田 修丞	42
「また明日」から広がる輪	吾孀第二中学校	高荷 祐羽	43
素直になる勇氣	桜堤中学校	金子 千桃	44

○中学校三年生の部

努力は孤独じゃない	本所中学校	川 又 葵	46
私の夢	吾孺第二中学校	白 川 紗 凧	47
人の心に触れられる人に	吾孺立花中学校	井 伊 陽 希	48

○佳作一覧……………51

○講評……………墨田区立吾孺立花中学校長 河野敏也……………56

○審査員一覧……………57

最  
優  
秀  
賞



わたしとママのないしよのじかん

中和小学校 一年 大堀 麦

わたしのかぞくは七にんかぞくです。きょうだいは四にんです。わたしのしたにおとうといもうとが三にんいます。一ばんしたのおとうとはまだあかちゃんです。おとうさんもかえりがおそいので、ママは一りでわたしたちのおせわをしてくれます。そうじやせんたく、あかちゃんのおせわ、おとうとたちがけんかをしていたらやめさせたり、ママはいつもたいへんそうにしています。わたしもおてつだいでいるけれどそれでもママのじかんはたりないかんじです。

いそがしいママだけどわたしだけにつくつてくれないしよのじかんがあります。おとうとたちもしらないママとわたしだけのじかん。二りでおでかけしたり、えいがにいたり、ケーキをつくったりしてくれるじかんです。そのじかんは、わくわくしてとつてもうれいじかんです。

これからもないしよのじかんをつくつてね。いつもかぞくの

ためにありがとう。ママだいすきだよ。

ながなわの思い出

第三寺島小学校 二年 大野 泰知

ぼくの小学校では、あきからふゆにかけて長なわをやりまゝ、体いくのじ間や、休みじ間にれんしゅうをして、ほんばんをむかえます。一年生から、六年生まで、クラスごとに、やりまゝ。三分間に、何回とべたかを、きそいます。

はじめてチャレンジしたら、十回しかとべませんでした。どうしたらたくさんとべるかクラスのみんなと、さくせんを考えました。まず、まわしている人のすぐとなりでスタンバイします。つぎに、みんながつめてならびます。なわがじめんにつく音が聞こえたら、走つて、なわに入ります。なわのまん中らへんで、つまさきで、とびます。さいごに、なわをまわしている人のすぐとなりぬけます。

じつさいにやってみたら、思うようにはできませんでした。どうしたら、うまくとべるようになるのか考えるために、自分

たちがながなわをとぶどうがをとって、みんなで見ました。そしてみんなとはなしあいしました。そして、とぶタイミングがわからない子と、ながなわがとくいな子が、こうごになるようにじゅんばんをかえました。ながなわがとくいな子がせなかをおして、なわに入るタイミングをおしえることになりました。それからみんなとそうだんして、もくひょうをきめました。まずは百回、クリアできたら百五十回、二百回、さいごに二百五十回です。もくひょうにむかって、みんなでたくさんれんしゅうしました。

本ばんの日になりました。

「よーい、スタート！」

はじまりのあいずで、先生がなわをまわしはじめました。一ばん目にぼくがとんで、先生が、回すをかぞえはじめました。

(みんな、がんばれ！ひっかからないように、がんばれ！)

と思いながら新きろくをめざしました。もとのきろくの二百回をこえると、

(いいぞ、そのちょうしだ！)

と、うれしくなってきました。先生が、

「二百三十七かい。」

というと、おわりのあいずがありました。ぼくは、うれしくて、

とびはねて、ともだちとハイタッチしました。ともだちときょうりよくしてもくひょうをたっせいできて、うれしかったです。今年も、もうすぐながなわのきせつがやってきます。今年のもくひょうは、三百回をこえることです。みんなときょうりよくして、がんばりたいです。

## 大好きなお父さん

第三吾孀小学校 三年 熊谷 幸美

あなたの名前には、どんな思いがこめられていますか。私の名前は大好きなお父さんが考えてくれました。私の名前は「幸美(ゆきみ)」です。この名前には、お父さんの願いと願いが三つこめられています。

一つ目は、願いをこめた「幸」です。お父さんは「ずっと幸せに生きてほしい」という一番強い願いを、この字にこめてくれました。二つ目は、思いをこめた「美」です。美しいものやきれいな景色を見たり、いろいろな経験をしたりして、心も体も美しく成長してほしいという思いです。三つ目は、家族のきずなです。お父さんの名前「浩一(こうじ)」の「浩」と同じ読み方をする漢字の一つに「幸」があります。お母さんの名前

「美千代（みちよ）」からは「美」をとりました。お父さんとお母さんの思いが重なって、私の名前を「幸美」と名付けてくれました。

お父さんは、この名前を決めてお母さんに伝えるとき、あまりの嬉しさに泣きながら話をしたそうです。その話を聞いたとき、私もとても嬉しくなり、自分の名前を大好きになりました。これからもずっと大切にしていきたいと思います。

私はお父さんの笑顔がとても印象に残っています。お父さんはいつも私に笑顔で話しかけてくれました。怒ったことは一度だけだと思います。お父さんの笑顔を見るたびに、私も自然と笑顔になることができました。お父さんにはおもしろい友だちがたくさんいました。みんなでご飯を食べたり、遊びに行ったりして、いつも楽しく笑顔があふれていました。お父さんの笑顔に周りの人が自然とひきつけられ、友だちも集まってきたのだと思います。そして、そのわの中には私もいて、たくさんの笑顔にふれることができました。

お父さんが教えてくれた「笑顔」は、私の宝物です。これからも私は笑顔を大切に、友だちをたくさんつくりたいです。そして、私には客室じようむ員になるという将来の夢があります。お客様に笑顔で優しく接するじようむ員を目指します。私

の仕事を通して、お客様に旅行を楽しいものにしてほしいと思います。夢をかなえて「幸せ」に「美しく」生きていきたいと思えます。

お父さん、ありがとう。また会いたいな。そして夢に向かって頑張るからこれからもよろしく。

## 心に虹をかけよう

第三寺島小学校 四年 田中 善

みなさんは、友達は大切だと思いませんか。多くの人が大切だと答えるのではないのでしょうか。ぼくも大切だと思っている一人です。そう強く感じたのは、ある出来事がきっかけでした。

学校の帰り道。くもり空だったその日は、雨がぱらぱらとふっていました。雨がそれほど強くふっていませんでした。かさささずに手に持っていました。それに加えて荷物は背中にランドセルと、両手には重い本が五冊も入った手さげ、道具箱、体育着ぶくろを持っていました。そんなぼくのとおりには、同じように両手いっぱい荷物を持った友達がいて、二人で一緒に帰りました。すると、雨がだんだん強くなってきて、かさをささそうと思いましたが、両手の荷物が重くてうまくさすことが

できません。ぼくの心に、大雨雷注意報が発令されました。

少しすると友達は先に帰り、一人で歩いていた、その時でした。後ろの方から、

「おい。荷物、持つよ。」

と、友達がぼくのところへ戻ってきてくれたのです。それから、ぼくの荷物を少し持ち、家まで一緒に来てくれました。おかげでぼくの荷物は軽くなり、ぼくはかさをさすことができました。ぼくの心に発令されていた注意報は解除され、すみきった空に虹がかかったような気持ちになりました。

ある日の道徳の授業で、友達を大切にすることというのはどのようなことなのかについて考えました。ぼくは、自分がぎせいになっても友達のためになることをするのが大切にするということだと思いました。けれど、友達のためにとまって泣いている友達に声をかけたとき、返事は返ってこず、ぎやくにいやな思いをさせてしまったことも思い出しました。友達のためだと思っただけでも、それが相手のためにならないこともあるのだと知りませんでした。

困っていたぼくを助けてくれた友達は、きつとぼくの顔や声に目や耳をかた向けてくれていたからこそ、ぼくの思いに気付いて行動ができたのだと思います。だからぼくも、相手の気持ち

ちを考えて、その人のためになるように手を差し伸べられる人になりたいです。そして、その人の心に虹をかけてあげられたらいいと思います。そのようにすることで相手もうれしいし、喜んでいる相手の姿を見てぼくもうれしくなると思います。ぼくの心にも虹がかかるはずです。これからも、相手の気持ちを考えた言動を心がけ、友達を大切にしていきたいです。

### 話せなかつた自分

曳舟小学校 五年 市之瀬 光里

小学校に入学した時、私は話すことが出来ませんでした。友達には、

「何で話さないの？」

とよく聞かれました。休み時間は、一人でタブレットをしていることが多かったです。

周りからは静かな子、無口な子とされていました。母が学校の友達から、

「学童ではよくしゃべっているのに、学校では、ほとんどしゃべっていない。」

と聞いて、私の様子がいつもとちがうことを気にかけてくれま

した。そして、家ではおしゃべりで家族を笑わせるのが好きなのに、学校など特定の場所や場面になると、全くしゃべれなくなる不安障害の病気であることが分かりました。やっと周りの人達に、私が病気であることを理解してもらいましたが、なかなか声を出すことは出来ませんでした。話そうとすると、のどに何かがつまってしまい、声を出すことが出来ませんでした。なぜ、そうだったのかは自分でも分かりませんでした。

特に、日直で前に出て発表する時は、話すのがこわくて気持ちが悪くなりました。学校へ行くのがだんだんきょうふになってきました。それから、毎朝学校へ行く時間になると、イヤイヤと激しく暴れて、泣いていました。一時間目には間に合わず、遅れて登校する日も多かったです。

三年生になり、双子の姉と同じクラスになり、姉がいるだけで気持ちがホッとして、少しずつ話せるようになりました。友達とも遊べるようになりました。話せなかった時、友達の話を聞いたり、うなずいたり、首を振ったり、目を合わせたりして自分の気持ちを伝えました。友達は、遅刻してきた私を、

「おはよう。」

と迎えてくれました。

「よく来たね。」

「がんばって来たね。」

と先生も温かい声をかけてくれました。そんな私でも、みんなはいつも輪に入れてくれました。

今でも、自分から話すのは得意ではないですが、友達と話すのは楽しいです。家族や友達、先生方、たくさんの人達に支えてもらい、今では学校へ通うことが出来ています。いつか大きな声で、＼ありがとう＼と伝えたいです。

心の病気は、外見では分かりにくく、周りから理解してもらうのは難しいです。もし、これからも自分の周りに同じような人がいたら、＼がんばろう＼や＼大丈夫＼とはげますような言葉はかけず、そっとそばにいてあげようと思います。待っている人がいる。＼分かってくれる人がいる。＼ことを伝えたいと思います。

## 盆踊りから始まる人とのふれあい

両国小学校 六年 原 愛莉

みなさんは盆踊りは好きですか。私は大好きです。なぜなら、盆踊りで友達と踊ったり、屋台でかき氷などを買ったたりすることが楽しいからです。私が所属する町内会では、毎年八月に大

きな盆踊りが開催されていて、ゲームや、飲み物、食べ物を提供する屋台を出しています。私は昨年、かき氷の売り子としてお手伝いをしました。かき氷を持ちながら人がたくさん集まっている所に向かい、大きな声で

「かき氷はいかがですか。おいしいですよ。」

と言いながら歩き回りました。結果、かき氷は完売しました。

盆踊りの売り子として手伝ったことで、私はたくさんの大切なことを学びました。

第一にお客さんとのふれあいです。私の町の盆踊りは、地域の人に加えて、観光客が集まる場所なので、ただかき氷を売るだけでなく、お客さんに笑顔で接しました。そうするとお客さんも笑顔で買ってくれました。

第二に地域とのつながりです。盆踊りは地域の文化や伝統を伝えるイベントでもあります。売り子としてその一部を担うことで、自分もその一員として、地域とのつながりをとても感じました。

第三にチームワークです。盆踊りの準備や運営は多くの人と心をあわせて行うものです。友達同士で助け合ったり、大人の人に売れ行きの報告をしたりしていました。

第四に思いやりの心です。外国のお客さんに売る時は、英語

でシロップの種類を説明したら喜んで買ってくれました。また、食べ物を売っていたので、髪を結んだり、消毒液を持ち歩き、こまめに消毒をして、お客さんが嫌な気持ちにならないように気を付けながら売るようにしていました。

私はこの経験を通して、「人とのふれあいの大切さ」や「地域の中で育つということ」の意味を強く感じる事ができました。人とのふれあいは、話をしたり、一緒に過ごすことだけではありません。周りの人とお互いに信頼し合うこと、人を思いやること、助け合うことなのだと思います。また、それは初めて会う人に対しても同じなのだと感じました。

今、社会では人とのつながりが少ないと言われることが多いです。でも私の町には、盆踊りのように地域の中で人とふれあう機会があり、私たちは心がぼっと温かくなる瞬間を経験することができています。自分一人では経験することができないことも誰かと協力すれば実現できるという喜びや達成感を、周りの人とわかち合ったり、後輩に伝えながら、これからも大切にしたいです。

楽しいお祭りの思い出

豎川中学校 一年 新里 紗英

私が長年住む緑町では毎年夏にお祭りがあります。私は今年も母校で行われている地域のお祭りに行きました。弟と私は数々のゲーム屋台で遊び、とても楽しめました。そしてこの気持ちは善意で動いている人の努力で成り立っていると気づきました。

私の母は昨年と今年の二年間、町内会の子供会役員を務めています。今年は二年目役員として千本つりのゲーム屋台の責任者になったということで母が夏祭りの準備をしていました。

「夏祭りが始まる数ヶ月前、母は昨年の景品まとめを手に持ちながらどの景品を発注しようか考えていました。六月から本格的に仕事が忙しくなっていました。私は当初「毎週子供会で会議があるのかな」くらいしか考えていませんでした。しかし実際はSNSを通じてお祭りやそれ以外のラジオ体操や資源回収、もう一つの夏イベントである亀戸天神祭の模擬店のやり取りで

時間を使っていたり、我が家に千個ほどのゲーム景品が届き廊下が歩けなくなったりと、初めて見る光景がありました。イベントのためにそんなに準備をしているとは思ってもいなかったのに驚きました。そして母が子供会の役員になってくださった仕事をしていた時間も労力もかなりかかることを知りました。母の話によると、ほとんどの人が共働きの中、地域活動をしているそうです。このようなぎりぎりの時間と体力を結集させて町内イベントを続けていると思うと、これらの思い出は貴重だと気づきました。

そして夏祭りが行われました。子供会の人以外にも母校のお父さん方や地域の方がテントの設営やトラックでの搬入などの力仕事をボランティアでやってくれました。どの町内会のゲーム屋台も大盛況で、どこも何十人もの子どもが並んでいました。その分、母は気合いを入れて接客をしていました。弟は千本つりをしてブロックの景品をもらえて家でも楽しく遊んでいました。最後には「また来年も行きたい」と言っていました。後から聞いた話ですが、千本つりには一時間半ほど開いて五百人ほどの子どもが来たそうです。

私は数時間のお祭りのために全力を注いで仕事をしている大人が大勢いることを目の当たりにしました。私たち子どもを歓迎してくれているから、楽しいお祭りの思い出があるのだと知って地域の人たちは繋がっている、寄り添ってくれていると感じました。また、別のお祭りや冬にあるおもちつきも今回くらい準備していると思うと、これから町内会の人にしつかりと「ありがとうございます」と言おうと思いました。私も大人になって町内会の人のように人を喜ばせるために動ける人になりたいと思います。

## 今より明るい世界を

寺島中学校 二年 福井 瑠莉

「どうして障害者というたった一つの違いで差別されてしまうのだろうか。」

昨年、福祉学習を通して生活についてよく見直した際、私がふと感じた疑問です。皆さんは「障害者」に対してどんな印象を持っていますか？私は世の中の多くの人が可哀想や関わりにくいといった否定的な言葉を印象付けているのではないかと思いました。正直に言うと、私自身も以前はそのような印象を

持っていた一人でした。

そんな私の印象を大きく変えてくれたのは昨年の七月にあった特別支援学校との交流です。私たちは特別支援学校に訪れた生徒の皆さんと「だるま運びゲーム」と異なる学校の生徒が協力して取り組むゲームをしました。ゲームの前には周りの子とお話する場面がありました。その時、私は知的障害の方と初めてしつかりと言葉を交わしました。私はその瞬間を忘れません。今まで心のどこかで壁を感じていた障害者は決して「可哀想」なんかではなく私と同じ、一人の人間ということには変わりがないと分かったからです。一緒に活動をした特別支援学校の生徒と、初対面ということを忘れるほど自然に関われました。

この経験をもとに、普段の生活の中での障害者との関わりについて関心を持ちました。皆さんはヘルプマークを知っていますか？ヘルプマークとは、見た目からは分かりにくい援助や配慮が必要な方が持ち物に付ける赤い十字とハートの印のことです。もしそれを付けている方が助けを求めている、辛そうにしていたら、ためらわず役に立ちたいと心から思いました。そう思うようになったのはやはり障害者との関わりがきっかけでした。ぜひ障害者に対して否定的にならないうら障害者との関わる機会を設けて欲しい、それが私の願いです。そうすれば障害

者との共通点が見つかり世界が広く見えるはずです。

私は幼い頃、パラリンピックを見ている際、障害を患っている選手に対してテレビ越しに「可哀想」と言ってしまうことがありました。そのとき、父母は「可哀想なんかじゃないよ」と口を揃えて言いました。当時は父母が言っていた言葉のどこかに引っかかっていたかもしれません。昨年、障害者と関係を持つてからパラリンピックを見たら、父母が言っていた言葉の意味が分かりました。可哀想なんかではなく、自分の輝ける道を探して、そこで自分の個性を発揮できること、これは素晴らしいことなのだと思えることが出来たからです。

私は障害者と交流をし、沢山のものの見方が変わりました。皆さんも是非、障害のある方と繋がりを持つてみてください。障害者とは障害があるというたった一つの違いだけで共通点の方がきつと多いはず。一人一人が障害者に対しての理解を深めれば、障害者が生きやすい世界を私たちが作ることができると信じています。



## あの子の勇気を受けとって

桜堤中学校 三年 金田 梨希

みなさんは、これまでの人生の中で人に支えられた経験はありますか。おそらく多くの人が誰かの支えによって救われたり、前に進むことができたことのあるのではないのでしょうか。私にも忘れられない支えられた経験があります。

それは、小学校三年生の時のことです。私は、クラス替えをきっかけに学校へ行きづらくなってしまった時期がありました。仲の良い友達と離れ、新しいクラスに中々上手く馴染めず、いつも不安な気持ちでいっぱいでした。教室に入るのが段々と苦しくなり、朝になるとお腹が痛くなったり、涙が止まらなくなったりしました。「みんなは楽しそうにしているのに、どうして私は教室に行くのがこんなに怖いんだろう。」と毎日悩み、次第に学校へ行くことへの恐怖心が大きくなっていききました。

そんな私を一番近くで支えてくれたのは、家族でした。特に母は、私が学校を休んでしまっても、責めたり怒ったりせずに、そっと寄りそって話を聞いてくれました。家族のそんなあたたかい行動が、少しずつ私の不安を和らげてくれました。

そしてある日、私は勇気を出して教室へ入ろうと思えました。

ですが、教室の前まで行った時、どうしても足がすくんで入ることができず、トイレの前で一人で泣いてしまいました。すると、たまたま通りかかった同じクラスの子が私を見つけて、「大丈夫？」と声をかけてくれたのです。その子とは、特別仲が良かったわけではなく、普段はあまり話したこともありませんでした。それでも、その時の「大丈夫？」という言葉は私の心にまっすぐ届きました。思わず涙があふれて止まりませんでした。その子は、「一緒に行こう。」と言って、私の手を引いて教室まで連れて行ってくれました。その何気ない行動に、私は大きな勇気をもらいました。その日をきっかけに、私は少しずつ教室に入ることができるようになりました。

この出来事を通して、私は「人と人とのふれあい」がもつ力の大きさに気がつきました。それは特別なものではなく、日々の小さな言葉や行動の中にあるものです。「大丈夫？」というたった一言が、時には誰かの心の支えになり、その人を救うことがあるのです。ふれあいとは、相手の気持ちを思いやること、その思いやりを行動に表すことなのだと、私は感じました。

これまでの経験を通し、私が今考えることは、「今そばにいてくれる人が当たり前ではない」ということです。あの時、家族や友達が私のそばにいてくれたからこそ、私は辛い時期を乗

りこえることができました。人と人とのふれあいは心をあたため、前に進む力を与えてくれます。私はこの気持ちをこれからもずっと忘れず、大切にしていきたいです。



優  
秀  
賞



## 小学校 一年生の部

えがおつながらるぼんおどり

両国小学校 一年 小川 希乃香

このなつ、わたしはりょうごくのぼんおどりにさんかしました。八月二日と三日の二日かん、かいじょうにはたくさんの人があつまり、ねつきにあふれていました。

お母さんは、フランクフルトやさんのでみせでお手つだいをしていたので、わたしはお父さんとお兄ちゃんとしょに、さんかしました。

かいじょうについて、まずは「キッズスペース」にむかいました。そこで、おたのしみけんを三まいもらいました。わたしはそのうちの二まいで、やきそばをかって、お父さんとお兄ちゃんにおみやげとしてあげました。のこりの一まいは、「せんぼんびきくじ」につかいました。ひもをひいてみると、ずつとほしかったスクイーズのおもちやがあたつてとてもうれしかったです。ほかに、わなげなど、いろいろなあそびをして、おまつりをたのしみました。

一ばんたのしかったのは、がっこうのおともだちとあそべたことです。なつやすみちゅうにあえなかったともだちとひさしぶりにあえて、しゃしんをとったり、おにごっこをしたりして、ずつとわらっていました。

よるになると、みんなでわになっておどるぼんおどりがはじまりました。「こいするフォーチュンクッキー」がながれると、みんなおおもりがりでした。アンコールもありました。おなじちいきにすむたくさんの人たちと一つになっておどることがとてもたのしくて、ちいきのひとたちとのつながりをかんじました。

おどっているとき、まわりをみると、たくさんのひとがえがおでおどっていました。おともだちも、おとなのひとも、みんなたのしそうでした。

こんなにたのしいおまつりができるのは、じゅんびをしてくれたちいきのひとがいてくれたからだとおもいました。ぜひ、かんしゃのきもちをつたえたいです。

ぼんおどりをとおして、わたしは、たくさんのえがおをみつけました。みんなで一つのことをたのしむことで、こんなにた

くさんのえがおがうまれるのだとしりました。

らいねんもまたさんかして、ちいきのひととえがおでつながりたいです。

## おにいちゃんはライバル

第三寺島小学校 一年 岡田 泰輔

ぼくには3さいとしうえのおにいちゃんがあります。おにいちゃんはやさしいです。でも、たまにけんかもします。すいえいではぼくのライバルです。おにいちゃんにかちたいとおもっています。おにいちゃんは、おなじスイミングのせんしゅクラスにいました。ぼくは、いくせいクラスなので、もつとはやくおよげるようになってひょうじゅんタイムをきつたらおにいちゃんのいるせんしゅクラスにあがることができます。はやくせんしゅクラスにあがっておにいちゃんといっしょにおよげるのをたのしみしていました。

でも、おにいちゃんは7がつにスイミングをいせきしてしまいました。もつとはやくおよげるようになるためにとおいスイミングにいきました。おにいちゃんは、

「はやくいっしょのせんしゅクラスになって、れんしゅうでバ

トルしようね。」

といっていたのに、ぼくとおなじスイミングをやめてしまいました。ぼくはかなしかったです。もくひょうをたっせいできなくなりました。

でも、ぼくはおにいちゃんのきもちがわかります。もつとはやくなりたいというきもちです。それは、おにいちゃんがいえでもトレーニングをしてどりよくしているのを見ていたからです。だから、ぼくはおにいちゃんとはべつべつのスイミングでがんばることにしました。そしてあたらしいもくひょうをたてました。おにいちゃんとはいっしょにれんしゅうできないけど、おなじたいかいにしゅつじょうすることができません。そこでおにいちゃんとバトルができます。

だからぼくは、はやくおにいちゃんとおなじたいかいにでてバトルがしたいです。そこでおにいちゃんにかつことがいまのぼくのもくひょうです。



## たくさんのありがとう

曳舟小学校 一年 成田 詩絵

わたしには、「ありがとう」をいいたいひとがたくさんいます。  
す。

おかあさん、いつもごはんをつくってくれてありがとう  
います。おかげで、げんきにかっこうにかよふことができて  
ます。ともだちともげんきにたのしくあそぶことができてい  
ます。

おねえちゃんのさえちゃんへ、べんきようをおしえてくれて  
ありがとうございます。わたしがわからなくて、こまったとき  
に、やさしくおしえてくれました。おかげで、じしんをもつて  
べんきようができるので、とてもうれしいです。

おとうさんへ、ならいごとのそろばんで、わからないところ  
をやさしくおしえてくれてありがとうございます。おかげで、  
たのしくそろばんじゅくにかよふことができています。けいさ  
んがとてもはやくできるようになりました。

おばあちゃんへ、いつしよにあそんでくれてありがとうござ  
います。とよすこうえんにいったことがとてもたのしかったで  
す。おかげで、おばあちゃんとのたのしいおもいでがひとつふ

えました。

おじいちゃんへ、いつしよにあそんでくれてありがとうござ  
います。つみきであそんだことをいまでもおぼえています。と  
てもたのしかったです。おじいちゃんのおもいでひとつふ  
えました。

わたしのまわりには、たくさんのひとがいて、そのひとたち  
のおかげで、げんきにたのしく、せいかつできています。  
これからもたくさんのひとに、ありがとうとつたえて、げん  
きにたのしく、せいかつしていききたいです。

## わたしのかぞく

東吾嬬小学校 一年 藤井 翼咲

わたしには、かぞくが3にんいます。おねえさん、おかあさ  
ん、おとうさんです。だいすきな3にんのことをかこうとおも  
います。

さいしよは、おねえさんのことをかきます。おねえさんは、  
わたしとはちがうがっこうにかよっています。なぜかというと、  
わたしのともだちがいまのがっこうのほうがおおくておねえさ  
んが6ねんせいだったからです。おねえさんとはがっこうはち

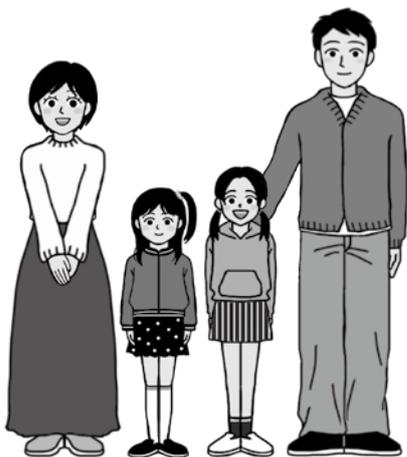
がくても、やさしくて、べんきょうもあそびもいつもいっしょにやってくれてだいすきです。おねえさんがいてくれてほんとうによかったです。

つぎに、おかあさんのことをかきます。おかあさんは、わたしのこととおねえさんのことをいつもかんがえてくれて、なんでもしてくれます。おかあさんは、わたしだけでは、できないことがあると、いつもてつだってくれて、できないことをできるようにしてくれます。まだひとりではできないことがたくさんあるので、てつだってくれるのはほんとうにうれしいです。てつだってくれるのはうれしいので、これからはすこしでもおかあさんのことでわたしができることはてつだっていききたいとおもいます。まいにちつくつてくれるごはんやおべんとうもとてもおいしいです。わたしがびょうきときはいつもそばにいてくれます。いつもいっしょにいてくれて、わたしのことをいろいろしてくれるおかあさんが、わたしはだいすきです。これからは、まいにちいそがしいおかあさんをすこしでもおてつだいたいとおもいます。

さいごにおとうさんのことをかきます。おとうさんはいつもはあさからおしごとでかいしゃにいつているのでよるのねるまえにしかあえません。でも、おやすみのひになったらおべん

きょうやあそぶことでやくそくをしたことは、かならずいっしょにやってくれます。やすみのひのおひるは、たまにごはんをつくつてくれて、おとうさんのごはんもとてもおいしいです。やくそくをまもつてくれるおとうさんが、わたしはだいすきです。わたしもやくそくはやぶらないようにしたいです。

わたしは、やさしくしてくれるこの3人のかぞくがいてくれてほんとうによかったです。いままでありがとう。これからもずっとみんなでいっしょにいたいです。たいせつでだいすきなかぞくをこれからもずっとだいじにしていきたいです。おねえさん、おかあさん、おとうさん、これからもよろしくね。



大切なおはよう

言問小学校 二年 永島 政高

ぼくの家の近くには、いろいろな会社やお店があり、学校に行くときや、かえってくるときにたくさんの人に会います。ぼくが近じよをあるいていると、「こんにちは。どこ行くの。」と声をかけてくれる人がいます。そのたびにぼくはすこしはずかしいけれど、「こんにちは。ならいごとに行つてきます。」とこたえています。近くにいるたくさんの人が、ぼくにやさしく声をかけてくれるので、とてもうれしい気持ちになります。あいさつを大切にする町なんだとかんじます。

おかあさんは、まい朝ぼくが学校へ行くときに、「おはようございます。と大きな声であい手の目を見てあいさつするのよ。」とそのりゆうも話してくれます。だからぼくもがんばつてあいさつするようにしています。だけどときどきはずかしくて、声が小さくなってしまったり、あい手の目をちゃんと見れなくなってしまうことがあります。だけど、まい朝会うはたふ

りのおじさんや、校もんのところ立っている校長先生たちは、にこにこおで「おはよう。」とあいさつしてくれます。えがおであいさつしてくれるととてもうれしい気持ちになります。

ぼくのおばあちゃんは「どんなときも、あいさつは大切よ。」といつも言います。おかあさんも、「あいさつは人とのコミュニケーションで、こころをつたえる大切な言ばだよ。」と教えてくれました。だからぼくだけでなく、お兄ちゃんもあいさつしています。

この町内にすんでいるみんなが、いつでもすれちがうときにしぜんといさつができたなら、まい日があかるくたのしくなると思います。ぼくはこれから、いろいろな人にあいさつをして「人にやさしくできる町」をつくつていけるようにがんばります。



## 大すきなTボールと子ども会のなかま

両国小学校 二年 上田 淳平

ぼくは、子ども会に入っていて、いろいろなイベントにさんかすることがすきです。イベントにさんかすると、ちがう学年のともだちとなかよくなって、知りあいが多くなりました。

学校に行くときやかえりみちに子ども会のともだちに会うともだちがぼくの名前をよんでくれて、話しながらあるきます。そのときが、ぼくの気もちのよい時間になります。

ぼくは、子ども会のイベントの中で、一ばんすきなイベントは、Tボール大会です。一年生のときに、はじめてさんかして、子ども会のおにいさんたちが、ルールをやさしく教えてくれて、Tボールがすきになりました。Tボールのかんとくは、ぼくがボールをなげるときにこまっていると、

「年下のともだちになげるときは、ワンバウンドでなげてね。」と声をかけてくれます。おにいさんたちは、ぼくがよいプレーをすると、

「ナイスプレー。」

と言ってほめてくれるし、ぼくがわからないことや、まだできないことがあると、

「じゅんぺい、ドンマイ。」

と言ってはげましてくれます。かんとくや、おにいさんたちと話していると、ぼくはうれしくて、もつとれんしゅうをしたくなります。まい日、Tボールがあればいいのになと思っています。子ども会に入って、いろいろななかまに出会って、ぼくは、たのしんでいます。

## やっぱり四人家ぞくがいいね

押上小学校 二年 菅原 奈乃羽

「えへえー！えへえー！」

わたしの目の前でおとうとが生まれて大きな声でなきました。おとうさんといっしょにびょういんに立ち会いに行つたのです。おかあさんはいたそうにしていたし、赤ちゃんにはちかづいていたのでおどろいたけれど、かんごしさんがタオルにくるんでくれたおとうとをはじめでだっこしたとき、かんどうしてなみだが出ました。

四人家ぞくの生かつかはじまりました。ミルクをあげてゲッブをさせたり、オムツがえやおふろに入れる手つだいができることがうれしかったです。しかしわたしは赤ちゃんはかわいい

だけではなくとても大へんだということに気がつきました。じぶんでねむれなかったり、ミルクもすこしずつしかのめないのでまたすぐにおなかですいてばかりいます。よるものんかいもおきるのでおかあさんとおとうとはべつのへやでねていました。みんなでお出かけするのをたのしみにしていただけに、一か月はおかあさんも赤ちゃんも家であんせいにすごさなければいけないのでつまらないです。わたしがおかあさんをよんでも

「ちよつとまってね。」

おとうとがねているときは

「しずかにしてね。」

と言われることが多くなりました。

わたしはある日がまんできないくらいとてもかなしくなってきました。わたしはある日があつてしまいました。おかあさんは

「三人家ぞくのほうがよかった。」

となきながらおかあさんに言ってしまった。おかあさんはわたしをぎゅつとだきしめながら言っていました。おとうともふとんの上で一人でないでいました。わたしは言っただけのこと言ってしまったと頭ではわかっていたけれどなみだがとまりませんでした。みんなではばらくない後、

「いまは赤ちゃんが小さいから大へんだけど、みんなですけあつてがんばろうね。」

と話しあいました。

おとうとはもうすぐ一さいになります。わたしがおもしろい顔をしたりおどつて見せると、

「きゃきゃきゃっ！」

と声を出してわらうようになったとてもかわいいです。あさまでぐつすりねむれるようになったので、よるはみんなと同じしんしつでねています。家ぞく四人でお出かけもたくさんしました。ずりばいやつかまり立ちができるようになって、わたしがべんきょうをしているとじゃまをしにきてこまってしまったたり、まだまだよくないので

「おとうとはたくさんだっこしてもらっていいなあ。ずるいなあ。」

と思うこともたまにはあるけれど、まえのようになかなしい気持ちになることはありません。

もつと大きくなってあるけるようになったら、手をつないでいっしょにおさんぽしようね。ねえねってよんでくれるのもたのしみしているよ。あときはひどいことを言ってしまったごめんね。やっぱり四人家ぞくがいいね！

## あいさつはたいせつ

八広小学校 二年 平山 波麗

まずはじめに、わたしがこの作文を書こうと思ったりゆうは、おかあさんに

「あいさつができていないよ。」

とよく言われていたからです。学校のあいさつ当ばんでは、大きな声で

「おはようございます。」

と言えるけど、きんじよの人と会ったときは、はずかしかったり、わすれてしまったりして、あまりあいさつができていないと思いました。

そこで夏休みに、マナーやおさほうについて書いてある本を読みました。そこには、

「あいさつは、人と人をつないでくれるステキなことば」

「あいさつは、人と気もちよくかかわるためのたいせつなれいぎのだい一步」

と書いてありました。

朝おきたとき、ごはんを食べるとき、家を出るとき、家にかえったとき、ねるとき、なにかをしてもらったとき、どんなと

きにもあいさつがあります。えがおで、あいての目を見てあいさつをすると気もちがたわりやすいです。目上の人には、おじぎをするといねいなあいさつになります。

そしてわたしには、たくさんのお友だちがいます。その中には、わたしがゆう気を出して自分からあいさつをしてお友だちになった人もいます。あいさつがつかないでくれたんだとかんじています。

また、ちがう国の人でことばがふうじないとなかなか話かけられないけど、

「ハロー」

「ニーハオ」

「アニョハセヨ」

など、あいさつならかんたんにおぼえられるし、あいさつだけでしりあいになった人もいます。耳が聞こえない人とは手話であいさつができるのもステキだなあと思いました。

これからは、だれにでも自分からあいさつをする。あいてにつたわるように正しいあいさつをする。そしてもっともお友だちをふやしたいです。

## 小学校 三年生の部

ひいばあばにありがとう

緑小学校 三年 倉本 小遥

私は夏休みに、ひいばあばのこのつに行きました。おそう式はせず、火そうだけでしたが、私はねつを出して行けませんでした。だからこのつに行けてうれしかったです。全いんでは来られなかったけど、むすめ二人にまご五人、ひまご四人で行きました。はじめて生のおはかを見ました。上野からバスでやく二時間半。とても遠いぼ地は、緑がいつぱいの所で、すぐくすぐくたくさんのおはかがありました。おはかの数が多くて、こんなにたくさんの方が亡くなったのかとおどろきました。夜だったら亡くなった人のゆうれいが出そうでこわかったと思います。

このつの前に、ひいばあばのほねを見せてもらい、さい後のお別れをしました。その時に、ひいばあばが亡くなってしまった時のことを思い出しました。三月に九十六さいのおたんじょう日会をしました。その時は元気でした。前に会いに行つ

た時より元気だったので、

「百さいまで生きられそうだね。」

と家族で笑って話していました。なのに四月に亡くなってしまったのです。びっくりしました。また会いに来るよと約束したのに。悲しかったです。ばあばもお母さんも、おじさんたちも、みんな悲しそうでした。みんな泣いていました。私ももっと悲しくなりました。知っている人が亡くなったら、こんなに悲しいのだと心がギュッといたくなりました。

おはかには、先になくなっていくひいじいじのこつつぼがありました。私が生まれる前に亡くなったので、会ったことはありません。でもしゃんは見たことがあります。ひいばあばのしせつのへやに、かぎってありました。

「仲のいいふうふだった。二人にはとてもかわいがってもらい、お世話になったんだよ。」

と前にお母さんが言っていました。おはかにひいじいじとひいばあばのこつつぼがならびました。きつとこれでさびしくないとします。また仲よくしてねと思いました。

おはかのふたとどる時に、ひいばあばにありがとうを言い

ました。生まれてきてくれてありがとう。ばあばをうんでくれてありがとう。お母さんにやさしくしてくれてありがとう。本当は百さいまで生きてほしかったけど、九十六さいまで生きたひいばあばは、すごいなと思います。のうこつにたくさんの人が来てすごいなと思いました。みんなにあいさされていて、それはひいばあばがやさしい人だったからだと思います。私もそんな人になりたいです。ばあばにもじいじにも長生きしてほしいです。お母さんもお父さんも、お姉ちゃんも弟もです。長生きしてほしい人がいっぱいいます。それはいいことだと思います。これからも長生きしてほしいと思う人がふえたらすてきだと思います。私も長生きしたいです。

## いつものおじさん

二葉小学校 三年 **岩本 望七**

わたしには、毎朝会っておじさんがいます。名前は、知らないけれどいつものおじさんです。おじさんは学校の近くのマンションをいつもそうじしています。おじさんはマンションのそうじをしながら、わたしたちが学校に行く見まもりもしてくれています。そんなおじさんとの出会いで、あいさつがとてもた

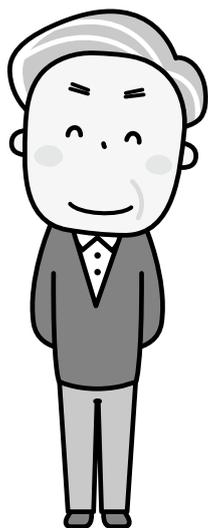
いせつなことに気づきました。

おじさんとはじめて出会ったのは、登校はんのまち合わせの場所でした。わたしは、三年生の四月にてん校してきて新しい学校にドキドキしながらまっつていました。その時、おじさんが「おはよう。」と声をかけてくれました。「おはようございます。」とわたしも答えました。おじさんは、ニコニコとしてくれたのできんちようがほぐれました。それから毎朝おじさんと話すようになりました。「何年生。」「今日はあついな。」と声をかけてくれたり、「今日は何のじゅぎようがあるの。」と聞かれて、「プールがあるよ。」と答えたら、「いいね。」と言ってくれてうれしい気持ちになりました。それからたくさん話すようになって、お友だちみたいになりました。

ある日、雨がザーザーとふっていた日おじさんがわたしたちにぬれないようにマンションの屋根の下に入っていいよと言ってくれました。その時、おじさんが学校に何もかんけいもないおじさんだと気づきました。じつは、おじさんは学校の近くのマンションのそうじをしているかんり人さんだったのです。わたしたちは、たまたまそのマンションの下を登校はんのまち合わせ場所にしていただけだったのにおじさんは、わたしたちの見まもりもしてくれました。いつも学校に行くのはあたり

前だと思っていたけれど、学校に安心して行けるのは、おじさんやいろんな人たちの見まもりのおかげだと気づきました。毎日会ってあいさつをするとお友だちになれて、こまったときにたすけあえるんだなと思いました。

あいさつは道具がなくてもかんたんにできることです。朝おきたらまず、家ぞくに「おはよう。」と言って、家を出るときは「行ってきます。」と言います。外ではおじさんみたいな地いきの人たちに「おはようございます。」と言って、学校に着いたら先生やお友だちに「おはようございます。」と言います。こうやってあいさつは人と人をつないでくれる大切な言葉です。さいしょはドキドキするけれど、おじさんがわたしにしてくれたように、わたしも自分からあいさつをして人と人とのふれあいを広げたいと思いました。



あーちゃんとママは、いつしよいつしよ

中和小学校 三年 鈴木 彩乃

わたしのお母さんは、フルタイムで仕事をしています。朝早く家を出て、ぎん業で夜おそくなることもしばしばです。そんながんばりやお母さんを、わたしはとてもそんけいしています。

でも、お母さんは仕事でいそがしく、いつしよにいられる時間が少ないので、わたしはさびしく感じることも多いです。れん休でいつしよにすごす時間が長いと、とくべつなことをしなくてもうれしく感じます。

お母さんは、わたしが三才の時に大きなびょう気にかかり、手じゅつをしました。それから五年い上った今でも、お母さんはけんさをうけにびょういんに通っています。

今ではフルタイムで仕事ができるほどになりましたが、お母さんはつかれやすく、体調がわるそうな時が多いです。

わたしは、夜中にふと目がさめて、「もし、ママがいなくなってしまうたら、どうしよう……。」と心ばいになり、ないてしまったことがあります。

そのことをお母さんに話すと、お母さんはわたしに力強くこ

う言いました。

「あーちゃん、大じょうぶだよ。ママはいなくならないからね。」

仕事でいそがしいお母さんですが、わたしが高ねつを出すと、ねないでかんびょうしてくれます。

あれは、わたしが一年生の時のことです。わたしは十二月にアデノウイルスにかかってしまいました。四十どのねつが出て、何も食べられず、くすりをのんでもどしてしまふほどになつてしまいました。

とうとう入いんが決まり、お母さんはつきそい入いんをすることになりました。

年まつで仕事がいそがしい時です。休みづらかったらうに、わたしの入いん中はずっと仕事を休んでそばにいてくれました。さらに、お母さんはこしがいたいのに、かたくてせまいソファーでも、がまんしてねおきしてくれました。

わたしは、ずっと点てきをうち、体はつらかったのですが、お母さんとすごせるきちょうな時間のありがたさをかみしめました。

わたしもお母さんも、けんこうで元気にすごせることが何よりのしあわせです。でも、

「できることなら、もつといっしょにすごしたい。」

それがわたしのねがいです。

わたしは、毎日しゆく題をしながら、お母さんの帰りをまちます。仕事をおえたお母さんは、今日もハアハア言いながら帰ってくることでしょう。そして、わたしをだきしめ、

「あーちゃんとママは、いっしょいっしょ。」と歌ってくれることでしょう。

### パパとのやくそく

梅若小学校 三年 松野 蒼音

ぼくは、国語のじゅ業「仕事のくふう見つけたよ」で、パパの仕事のMR（いりようじょうほうたん当者）について調べました。MRの仕事は、自分の会社を作ったくすりをい者や、やぐざいしにせつ明し、くすりが正しく使われるようにする事だと分かりました。ほかに、せつ明会やこうえん会のじゅんび・運えい・かたづけもあり、みだしなみ・あいさつ・言葉づかいにも気をつけなければいけません。

ぼくが五才の時「四月から、パパは新がた県でお仕事をする事になったから、家族とはべつべつにくらして、会えるのは一

か月に一回だけになる。」とパパに言われました。ぼくは、それを聞いてさみしくてないてしまいました。土曜日や日曜日パパが車を運転してくれて、遠くの公園に行ったり、ぼくの大好きなパパとくせいのおこのみやきが食べられなくなってしまう事がざんねんだと思いました。行ってほしくなかったけど、お仕事だからしかたないと思って、がまんしました。さみしいけれど、パパは新がたで一人でがんばっているから、自分も東京で、ママと姉と妹と四人でがんばろうと思いました。

パパが新がたにひっこす前に、ぼくはパパにこっそりよばれました。そして「家にいる男の子があおくん一人になっちゃうから、みんなを守ってあげてね。」と言われました。ぼくは、どうやってみんなを守ろうかと考えました。ママには、せんたくたたみやおさらあらいのお手伝いをして助けようと思いました。そして、虫が苦手な姉のかわりに家に出た虫をたいじして、こわがりな妹のためにトイレにつきそったり、いっしょにお風呂に入ったりすることにしました。ママのお手伝いをしてみて、ママはこんなたいへんな事を毎日ぼくたちのためにしてくれてたんだなと思いました。家にクモが出ると、ぼくがつかまえて外へにがしてあげています。妹だけでなくぼくもこわがりなので妹とは助け合って生活しています。パパは一人で、家族の

ためにがんばってくれていて、とても感しゃしています。この前もお休みの日に、会社であるテストのべん強をずつとしていると聞いて、大へんだなと思いました。パパは「みんなで行ったりするためにがんばっているんだよ。」と言っていました。

パパが新がたに行って三年たち、パパがいない生活にも少しなれてきました。でもやっぱり、パパが帰って来て家族みんなでゲーム大会をしたり、旅行に行ったりすると楽しくて、早く東京に帰って来ればいいなあと思います。あと何年で帰って来れるか分からないけれど、パパとした「みんなを守る」というやくそくをがんばって守ろうと思っています。



## 小学校 四年生の部

### 人とのつながり

業平小学校 四年 篠田 悠

ぼくは、町内会のお祭りの準備をしています。お祭りは来週が本番です。ぼくは、町会のおじいさんたちと一緒に準備をがんばりました。お祭りの係を決めたり、ちょうちんを、かざったり旗をたてたりする作業は暑くて、大変でした。でも、みんなで声をかけあいながら進めるとどんどんお祭りらしいふんい気になってきました。「がんばったね」とおじいさんにほめてもらったときは、とてもうれしい気持ちになりました。

準備をしていると、一人じゃできないことも、みんなで力を合わせればできることに気づきました。重たい旗を立てる時ささえあうと真つすぐ立てることができました。

ぼくは、準備を通して一つ思うことがあります。それは子どもやまの年の人が少ないので、これからはぼくたちが町内会を守っていかないといけないことです。今はおじいさんたちが元気にお祭りをささえています。いつかはぼくたちの番がく

ると思います。おじいさんたちを見ながら、いつかぼくたちがお祭りを守るぞと思います。

おじいさんたちはいつもたのしそうにお酒をのんでいます。大きい声で笑っています。いつか大人になったら、ぼくもそこにまぎって、みんなといっしょにわらいたいです。

お祭り本番がとても楽しみです。とくに、おみこしをかつぐのがまちきれないです。準備をがんばったぶんみんなといっしょに元気におみこしをかつぎたいです。そして、町内会のみんなに楽しんでもらえるようなお祭りになりたいです。

お祭りの準備を通して、近いすんでいるからこまったことがあつたらたすけあうような町内会にしたいと思いました。

町内会のおじいさんにずっと元気でいてほしい、おみこしは重いのおじいさんたちがもつてるのがすごい、おみこしは重いからかつきにくる子がふえてほしいと思いました。それで、お祭りの最後におかしをいっぱいもらって500円とやきそばをもらってうれしかったです。

大人のおみこしがあつて、町内会のおじいさんたちもやって、すごいなあと思いました。おみこしをかついでるおじいさんは

元気で神様が町内会のおじいさんにパワーを送っていると思いましたが。

## おじいちゃんとの日々

両国小学校 四年 海老根 みのり

私のおじいちゃんは、私が三年生のころすいぞうがんで亡くなってしまいました。おじいちゃんは私をすごく可愛がってくれて、私もすごくおじいちゃんが大好きでした。

おじいちゃんのすいぞうがんが病院で見つかったのは、秋ごろでした。その時、お医者様に余命が二ヶ月と宣告され私もショックを受けたことを今でも鮮明に覚えています。

おじいちゃんは、一人ぐらしだったので家族で話し合いをしただけか、私のお家でかん病することになりました。私は、かん病などをしたことがありませんでした。おじいちゃんが来た時は不安だったけど家族がみんなおじいちゃんを支えていて私は、かん病することをちゃんとみて学びました。

お茶や果物を持ってきたりするだけでもおじいちゃんは、笑顔で

「ありがとう」と言ってくれました。

今でもあの笑顔はわすれません。いつもあの笑顔で私に会っていたので、おじいちゃんが苦しんでいたのにも変わらず笑顔を作ってくれました。家にも、かんごしが来る日もありました。お父さんやお母さんは、仕事でおそくなる日もありました。お姉ちゃんは、中学生でじゅ業がおそくなることもあったので私とおじいちゃん二人でお家にいることもありました。なので、お母さんやお父さんみたいにはできなかったけれどお昼ご飯で、たまごかけごはんを作ったり、ホームアローンと言うえいが見ました。

家に来るかんごしさんもだんだん来る日がおおくなってきました。そして、おじいちゃんの具合もますますわるくなってきました。しゃべれなくなったり、ずっとねこんでいておじいちゃんの手をさわったらとても温かかったです。かんごしさんも

「さくらが見えるか見れないぐらいですかね」と言われました。その日わたしのお家で亡くなったおじいちゃんは、笑顔のしわがのこっていました。みんなでエンゼルケアをしました。おじいちゃんのひげをそったり、シャンプーをしたり、顔をきれいにふいたりしてあげました。エンゼルケアをしたあとのおじいちゃんの手はつめたかったです。

今のおじいちゃんは、私をお空で見せてくれるのでしようか。おじいちゃんがかつていた犬にも会っているでしようか。おじいちゃんは今でも笑顔だと私は思います。

## 大切な人がいるからこそ

第二寺島小学校 四年 渡邊 ひまり

わたしは、毎日平和な日々を送っています。しかし、なぜ平和な日々が送れているのでしょうか。その理由が、わたし達の周りにいてくれる、家族や、友だちや、かんきょうの取り組みをしている人がいるからです。この人達がいることが、平和な日々を送れている一番の理由です。そんな人達がいなかったらどうなるのかを、考えてみたいと思います。

まず、家族がいなかったらどうなるでしようか。当たり前のようにいつも家にいてくれる人がいないし、学校にも行けてないし、この世界に生まれてはいません。家族がいるからこそ、今自分がここにいて、学校にもふつうに通える。家族がいなくてこういうことはできません。

次に、友だちがいなかったらどうなるでしようか。学校に行っても友だちがいらないから話せない、プライベートで友だち

と遊べない、些細ささいななやみを相談したりできる友だちがいなくて、そんな生活になります。友だちがいるから、毎日が楽しく、笑い合い、ささえ合い、話し合うことができます。

最後に、かんきょうの取り組みをしている人がいなかったらどうなるでしようか。かんきょうの取り組みをしている人といえば、ゴミを処理してくれる人、樹木医じゅもくいの人などがいます。ゴミを処理してくれる人がいないと、ゴミはふえ、町がゴミに埋められます。感染症かんせんしょうになるリスクも高まります。樹木医の人がいないと、病気になった木がだれにもしんだんされず、そのままおれたりします。かんきょうの取り組みをしている人がいるから、区の周りにゴミがちらばっていることもなく、自然がたくさんのすてきな区ができています。

このように、わたし達がいつも平和な日々を送れているのは、大切な人がいるからこそ送れています。いつも周りにいる人にかんしゃを込めながらくらすと、毎日が、もっと大切になってくると思います。



## 手話で仲よく

曳舟小学校 四年 伊東 郁香

みなさんは、耳が不自由な人を見かけたことがありますか。私は、習い事の体そう教室で見かけました。その子は耳が不自由なので、やることが分からないようでした。いつもその子のお母さんがとりにいて、コーチの言ったことを手話で伝えていました。それでも、手話で伝えづらいことがあったり、伝えるのがおそくて、みんなについていけなかったりしたこともありました。私は、手話をおぼえれば、じっさいにやらないお母さんよりも分かりやすく伝えられて、その子とも仲よくなれるかな、と思いました。

そして、その日の練習が終わった後図書館へ行き、手話の本を二さつかりました。一さつ目は、日常用語の本です。「おはよう」などの手話のつていました。二さつ目は、ゆび文字の本です。これは、自己しようかいなどに役立ちます。家に帰り、一生けんめい勉強しました。かがみに向かって毎日練習しました。さらに、学校図書館でも手話の本をかり、ひまな時間に練習しました。

次の体そう教室の日、その子はいつも通りお母さんといっ

しよに来ました。私は、ウォーミングアップの時に、その子に向かって、たくさん練習した手話で自己しようかいをしました。その子は分かったようで、にっこりわらってくれました。その子のお母さんが、

「すごいね。じゃあ、この子にいろいろ教えてくれる。」

と言ってくれました。すぐにひきうけて、その子に、コーチの言っていることをいろいろ教えました。その子は、楽しそうに体を動かしていました。それから、いつも二人で、いっしょに行動するようになりました。その子はとても活発になって、終わった後、私の友達とも遊ぶようになりました。

今では、もうお母さんがいなくても体そうができるようになりました。

このように、「なかよくなりたいな」「困っていないかな」という気持ちから、体の不自由な人もなかよくなれることを知りました。これからも、体の不自由な人を見かけたら、勇気を出して、ジェスチャーや手話でやさしい声かけをしたいと思います。

## 小学校 五年生の部

### 野球から学んだこと

外手小学校 五年 小林 佳維人

ぼくは少年野球チームに入っていて、毎週のように練習や試合をしています。野球をしていると、うれしいこともあれば、悔しいこともあります。でも、どんなときもなにかを学んでいて、自分が少しずつ成長しているなと感じます。

試合に勝ったときは、もうとにかくうれしいです。仲間と手をたたいてよろこんだり、ハイタッチをしたり、そのときの気持ちは言葉では言い表せないくらいです。でも、負けてしまうとすごく悔しくて、家に帰ってから頭の中でずっと試合のことを考えてしまいます。「あの時もっと声を出せばよかったな」「あのエラーがなかったら」とくやしく思うこともあります。でもその気持ち、次の練習でがんばる力になります。だから勝った時も負けた時も、ぼくは成長できていると思います。野球は一人ではできません。ピッチャーが投げてもキャッチャーがいなければアウトは取れません。バッターが打つても

守る人がいなければ点を取られてしまいます。だからチームで声をかけ合ったり、ミスをした仲間をばげましたりすることが大切です。ぼくもエラーをして落ちこんでいた時に仲間が、「次はだいじょうぶ」と声をかけてくれたことがありました。その一言で元気が出て、「次はがんばろう」と思えました。仲間の言葉がこんなに大きな力になるんだと知りました。

かんとくやコーチの言葉も、ぼくを成長させてくれます。練習の時にきびしいことを言われる時もあります。でも、それはぼくたちがもっと上手になるために言ってくれているのだとわかっていきます。かんとくやコーチは仕事が終わったあとや休みの日に、時間を使って野球を教えてくださいます。ぼくたちが楽しく野球をやってほしいという思いで教えてくださいます。しかも、ボランティアでやってくれていると知った時、自分たちはこんなに大切にされているんだと、うれしく思いました。

そして、野球チームを支えてくれているのはかんとくやコーチだけではありません。お母さんたちがグラウンドを予約してくれたり、お弁当を作ってくれたりします。年末には、イベントの準備をしてくれたりもします。大人の人たちが協力してく

れているからこそぼくたちは安心して野球ができています。

ぼくは、野球は自分のがんばりだけでできるものじゃないと思います。仲間といっしょに力を合わせ、協力してくれる大人がいてくれているので大丈夫です。その事を忘れないでこれからもありがとうの気持ちをもって野球を続けていきたいです。そして学校でも友達を助けたり先生に言われたことをちゃんと聞いたり家族にありがとうを言える人になりたいです。これからもたくさんの人へのありがとうを忘れず野球を続けていきたいです。

## ライバルのタケル

両国小学校 五年 赤津 虎之介

ぼくは水泳をしています。そこには、タケルというライバルであり友達がいます。タケルと一しょに練習した四年間、ぼくは彼からたくさんの事を学びました。タケルがいたからぼくはタイムが速くなり、水泳をやめたくなくてもあきらめずに続けることが出来てきます。色んな種目で競い合い、練習後は毎回遊んで一しょに歩いて帰るタケルはぼくにとって親友です。

ぼくは、福島で四才のときに水泳を始め、二年生の春に東京

に転校しました。東京でも水泳を続けることにしたぼくはそこでタケルと出会いました。タケルは一つ年上ですが、お互い同じ水泳教室と地元の水泳クラブに所属し泳力も同じだったため学年がちがくてもぼくとタケルはどんどん仲良くなっていきました。ぼくとタケルはタイム測定のためにおたがい大声で応援したり、おたがいのタイム結果をくらべてくやしがつたりもします。タケルに負けるとぼくはすぐくやしけれど、これまでタケルがなかなかタイムがのびずに長い間スランプと戦っていたことも知っているので、彼が自己ベストをこう新した時は一しょに喜んで大きわぎします。

タケルとすごした中で一番覚えている場面は、水泳大会での出来事です。ぼくが四年生の時、ある大会で個人メドレーで優勝し、他の出場種目も全て三位以内に入ったため、十歳の部最優しゅう選手に選ばれました。その表しよう式の時、大声で

「トラおめでとう。」

と聞こえました。その声はタケルでした。タケルはコーチや家族以上にぼくの受賞を喜んでくれました。ぼくはライバルであり仲のいいタケルが喜んでくれたことがとても嬉しかったです。ぼくもこの先タケルのことをもつと応援したいとも思いました。

ぼくは、タケルがいたからきびしい練習にもへこたれず、こ

これまで水泳を続けてこれました。これまで何度もやめようと思つたし、つらくて帰りたいと思つたことも数え切れないほどありました。でも、タケルがいたから水泳をきらいにならずに毎日練習に行けました。ぼくはタケルからあきらめない強さ、友だちのがんばりをみとめて応えんする優しさを学びました。

来年の春にタケルは遠いところに引っこしてしまいます。タケルと一しよに泳げるのも残り半年です。残りの時間は、○・一秒でもお互いにタイムをちぢめて、最後の練習日は一しよに笑つてお別れしたいです。ぼくはこれからも水泳を続けていきますが、スランプに負けずたくさん応えんしてくれたタケルを思い出しながら、これからも自己ベストにちょう戦し続けたいです。

## ぼくとぼくと空手道

第四吾孀小学校 五年 鶴見 圭梧

ぼくは空手を習っています。二年生の時に少し学校が嫌だった時があつて、その時母に「近くに空手道場があるんだけど、今度体験に行つてみない？」と言われたことがきっかけで習い始めました。

ぼくはこの体験教室の一日が三年以上経つた今でも強く印象に残っています。その頃のぼくは新しい環境に飛び込むことが怖くて、先生や友達その教室の雰囲気になじめるか心配で仕方ありませんでした。でも先生は初対面のぼくに目を見てあいさつをして話してくれました。そして友達は分からないことばかりで戸まどつていた自分に身振り手振りを添えて、とてもやさしく教えてくれました。空手の練習はきびしいけれど温かい場所だと思ひました。

入会を決意し、それからはひたすら練習にはげみました。どんなに練習をしても長く続けている友達にはかなわなし、帯の色が変わると先生の指導もとてもきびしくなつて、はずかしいけど泣いてしまったことも一回ではありません。試合に何回出ても一勝もできなくてぼくはどうとう限界を感じてしまいました。でもこのまま辞めると弱い自分のままだと思ひ、試合で一勝できたら親に辞めたいと言おうと心の中で決めました。

試合本番は必死に戦いました。苦しくて痛くて、でも背後から先生の指導と毎日練習に付き合つてくれた父の声えんが聞こえ、必死に相手に食らいつき、初めて一勝をすることができました。そのしゅん間、あれだけ辞めたかつた空手をまだまだ続けようと思ひました。もっと強くなりたい、そう思ひました。

でも続けたい理由はそれだけではないような気がしました。目標は達成したけれど、何かやり残した事がある気がしました。それが何かその時のぼくには分かりませんでした。

しばらくして道場に新しい仲間が入ってきました。昔のぼくがしてもらったみたいに、動きを一緒にやってあげたり立ち位置を教えてあげたりしました。ぼくはその時にハッとしました。試合後に感じた何かをやり残した感じは正にこれなのではないかと思いました。新しい仲間や友達に目を向けて、教えてあげたりやさしく接したりすることなのではないかということ。ぼくが三年前にしてもらったことを今度はぼくがやっていくという事なのではないかと思いました。試合に一勝して少し強くなった分、同じ分だけ周りに目を向けられるようになったのかもしれないと思いました。強くなるのと同時にやさしくもなれるのだと実感しました。空手道を通じて、弱かったぼくも少し強くなったぼくを見つけることができた気がします。

ぼくはこれからも練習にはげみ、もっと強くなりたいです。そしてもっともつとやさしくなりたいです。押忍。

## 人と人のお礼の言葉

第二寺島小学校 五年 亀田 昌宗

ぼくは、「ありがとう」という言葉について書こうと思います。なぜなら、この言葉は言った人も言われた人も、おたがいにいい気持ちになれる、とても親切な言葉だと思うからです。「ありがとう」と感謝の言葉を言われると、「親切にしてくれました」と、とても良い気持ちになります。相手に喜んでくれたことが分かって、自分もうれしくなるからです。

ぼくたちの毎日の生活は、たくさんの「ありがとう」でできています。でも、一番身近な人には、照れくさくてなかなか言えないことがあります。それは、家族に対してです。

お母さんは毎日家事や仕事をやってくれるし、お父さんはぼくたちのために仕事をがんばってくれています。それは当たり前のことだと思っていました。でも、ある日、勇気を出して、「お母さん、いつも大変な家事や仕事をがんばってくれてありがとうございます。」

と言ってみました。お母さんは、一瞬びっくりした顔をして、それから

「どうしたの？」

と笑いながらも、とても嬉しそうな顔をしてくれました。その笑顔を見たら、ぼくは「やっぱり親切な言葉って大切なんだな」と思いました。当たり前だと思っていたこと一つ一つに、ちゃんと「ありがとう」と伝えたら、もっと家族が笑顔になるんだと気づきました。

また、ぼくは「ありがとう」という言葉に助けられたこともあります。以前、給食の時間にはしを落としてしまった時、ぼくは「どうしよう」とあわてて、頭が真っ白になりました。その時、友達が何も言わずにおはしをかたづけ手伝ってくれました。ぼくが

「ごめんね。」

と小さい声で言うと、友達は

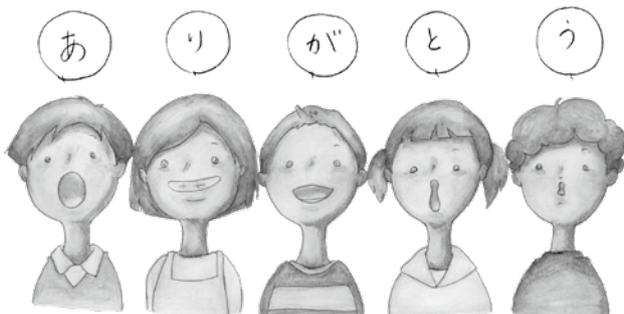
「大じょうぶ。」

と返してくれました。こんな時「ごめんね」ではなくて「ありがとう」と言えばもっといいのではないかと改めて思いました。助けてくれた友だちの優しさに、感謝の気持ちでいっぱいになりました。

「ありがとう」は、ただの挨拶ではありません。「あなたのしてくれたこと、ちゃんと見てるよ」「あなたの気持ちが嬉しいよ」というメッセージなんだと思います。だから、言われる

と安心するし、言う相手にも自分の気持ちが伝わるんだと分かりました。

これからは、心の中で思うだけでなく、たくさん「ありがとう」を言葉にして伝えていきたいです。友達や先生、そして家族に、心のこもった「ありがとう」を届けたいです。ぼくが言った「ありがとう」でだれかがいい気持ちになって、その人がまた別の人に優しくする。そうやって「ありがとう」の輪がどんどん広がっていったら、世界はもっと素敵な場所になると思います。



## 小学校 六年生の部

### 最高の仲間と最高の思い出

緑小学校 六年 出牛 夏子

ある金曜日、放課後に運動会の応援団として学校に残っていた。

「応援団の皆さん、これから運動会を盛り上げるために頑張ってくださいましょう！」

先生の気合の入った声で挨拶があった。いよいよ応援団長を決める時が来た。

去年の応援団長すごかったな。私も去年の団長みたいになって、最後の運動会を盛り上げたい！そうだ、応援団長になろう。同時に心が気合で埋めつくされた。

「応援団長に立候補したい人はいますか？」

先生の声で私はすぐに手を挙げ、みんなの前に出た。

「私は去年も応援団に入っていて、団長がかっこよくて、自分もそうなりたいたいなと思ったので立候補しました。応援団長として、運動会を盛り上げたいです！」

緊張して、何回も声がつまった。それでも自分の思いをみんなに伝えたくて、あとで後悔したくなくて、拳を握りしめながらみんなに向かって言った。その思いが通じ、私は応援団長になることができた。私を選んでくれたみんなの期待に応えるためにも、これから応援練習頑張るぞ。と気合を入れた。

そして、応援練習が始まった。みんなの前に立って、出席や予定を確認するときに、全員の視線が私に集まるため、緊張して話もうまく進められない。発声練習でも思うように声が出ない。すごく情けなかった。次は頑張ろうと思っても、やっぱりまだ声が出ていない。体育館練習で声が出せるようになったと思っても、校庭練習ではまだまだ声が小さい。頑張っても頑張っても、納得いくような声が出せるようにはならなかった。

そんなことが続いたまま運動会当日を迎えた。意外にも私の心は、不安よりも気合で燃え上がっていた。ふり返るとそこには仲間がたくさんいる。応援団は私だけではない。もう不安は消えていた。みんな頑張ってきたその思いを胸に団長として選手宣誓をし、ついに応援合戦の時が来た。

「赤組、絶対勝つぞー！」「オー！」

精一杯の声を出すと、みんなの声が私の背中をおした。私は一人じゃない。心の炎を青くして私は立ち位置に走った。赤組の私たちは、ありつたけの声を出した。

最終的に赤組は、勝負では負けてしまい、私は今までにないくらい泣いた。その時はただただ悔しかったけれど、後になってみれば、やり切ったこと、仲間と支え合えたことが何より嬉しかった。これまでの努力は消えたりしない。大事なものは、みんなで助け合い、支え合い、一生懸命努力して自分の最高の力を出しきることだということを学んだ。小学校の運動会はこれで終わりだけど、中学校高校と続いていく。これからも、みんな支え合って、最高の思い出を胸に成長していきたい。最高の仲間たちとの最高の思い出となった。

## 本当の思いやりとは

第一寺島小学校 六年 塩山 叶蓮

私はおしゃれが好きです。すると、成長と共に着ることができなくなってしまう服もたくさんあります。

この夏休みに母と一緒にそれらの服の仕分けをしました。そしてもう着ることができなくなってしまった服をお店に持って

いき「古着回収」をしてもらいました。古着回収とは着られなくなった服やサイズが合わなくなった服を集めて、必要な人に使ってもらう活動です。また今回持っていったお店では着ることができないものは、清掃用品に作り変えられリユースされたり、新たに繊維としてリサイクルされたり、エネルギー生産に利用されるなど、捨てられるものは一切なく利用されるということでした。お店の人に服を入れた袋を渡す時「これらの服は誰が着てくれるのかな。どのように利用されるのかな。」と想像しました。その時母が「これらの服は海外にも送られるんだよ。」と教えてくれ、私は「遠くの国の人が喜んでくれるんだよ。」とうれしくなりました。

しかしその日の夜に母がこんな話もしてくれました。「海外に送られた古着が必ずしも喜ばれるとは限らないんだよ。」私はびっくりしてその理由を聞いてみました。

ある国では、大量の古着が送られすぎて、地元で服を作っていた工場やお店が売れなくなり、仕事が減ってしまったそうです。また冬の厚いコートが暑い国に届いても使えずそのまま捨てられてしまうこともあると聞きました。中には、日本では「まだ着られる。」と思って送った服でも現地の文化や気候に合わず、ただのゴミになってしまう場合もあるそうです。処分

するのにもお金や手間がかかるため、かえって現地の人に迷惑になることもあると知りました。

私はその話を聞いて「喜ばれると思ってやったことが、相手を困らせることもあるんだ。」とおどろきました。同時に、本当に相手のことを考えることが大事だと感じました。最近、海外に送る前に国内で必要としている人に渡したり、現地の人体に必要なものを聞いてから送ったりする方法も増えてきているそうです。

ある日、両親の友達とその子供に会いました。そしてその子供が私のお気に入りだったフラミンゴの服を着ていて「これ好きなの。」と笑顔で言われた時はすごく嬉しくなり、心と心が通じ合ったようにも思えました。

もしもこれから私が誰かに何かを渡す時は「あげること」が目的ではなく「相手が本当に喜んでくれること」を目的にしたいと思います。服も、言葉も、思いやりも、渡し方ひとつで温かい力になります。

私はこの古着回収を通して、人と人とが支え合う本当の意味を知りました。そして、これからはその温かさを私からも広げていきたいと思いました。

## 伝統をつなぐ人と人のつながり

第三寺島小学校 六年 根布谷 諒

ぼくの住んでいる地域の町会には子供会という組織があります。子供会はもともと小学校の登校班のメンバーからなりたっていました。登校班がなくなるとともに入会するかどうかは自由になったそうです。ぼくはこれまで子供会のイベントに参加させてもらい、それがとても楽しかったので入会することにしました。もちろん入会しない人もいて人との関わりを取るのが苦手な人もいるだろうし、忙しくてあまりイベントに参加できないとか色々な理由があると思います。地域の中でのコミュニケーションの捉え方も当然人それぞれです。

そんな中でもぼくは子供会や町会のイベントに参加させてもらって知らなかった人とのふれ合いの機会があることに意味があると思います。町会の大事な行事の一つにお神輿があります。小さい頃はお菓子をもらえることがうれしかったのですが、お父さんからお神輿は自分たちが住んでいる街を守ってくれていると聞き、地域にとって大事な行事だと知りました。しかし担ぎ手がどんどん減っていて、長らくほかの地域からお手伝いに来てくれた人達が担いでくれていたそうです。子供神輿を担

いで巡行しきると大きな達成感を感じます。お神輿を担ぐ時は真剣な気持ちになれるし、協力し合う中で仲間との一体感を感じられるので今後も参加して地域の伝統をつないでいきたいという気持ちが生まれました。大人神輿を担げるのは高校生からですが、地域の人からも、

「子供が手伝ってくれるとうれしい。」

と言ってもらえることがありました。なので中学生になっても友達と見守り係として参加して子供会やお神輿との関わりが途切れないようにできればと思います。

子供会の行事を通して普段ではもてないコミュニケーションが多くありました。ラジオ体操は朝早く起きるのはきつかったけど、続けて参加したおかげで町会のおじさん達と顔見知りになりました。古くから続く町会ですが、今はその多くで高齢化が進み運営は簡単ではないそうです。どうしたら町会や子供会を継続していけるだろうかと考えた時に、「結束力」という言葉が浮かびました。「世代を超えた交流」が続くことで街全体に一体感が生まれ、地域の安全が守られ、伝統を受け継いで行くことができると思います。

子供会からは今年で卒業ですが、子供会の行事を通して街を守る人と人の結びつきについて考えるきっかけになりました。

これからは普段から子供達と関わってくれていることや見守ってくれていることへの感謝の気持ちを込めて地域の活動に参加して伝統を繋いでいきたいです。

### 祖母から学んだ大切なこと

八広小学校 六年 山口 千遥

私が小さいころまでの祖母は、元気で体がしっかりしておもしろい人でした。でも少しずつ病気を重ねていくようになっていり、ねていることが多く、話せる時間が少なくなっていました。祖母が最期に入院していた病院は、中学生以上の人しか面会することができず、私は祖母に会いに行くことはできませんでした。

会えない間に今までの祖母との関わりを思い出していました。祖母は悪くないのに、私の機げんでやつあたりをしてしまったり、あまり笑顔を見せていなかったことなどを思い出しました。また、祖母はすごくやさしくて、私が親に怒られて、泣いていた時、祖母の部屋に行くと乱れていた心がやわらぎ、おちついた気がしていました。だから私は祖母という時間が好きでした。祖母は、私の全てを受け入れ、見守ってくれていたことを初め

で実感しました。次に会えた時には、やさしく接したり笑顔で話せたらと思っていました。しかし、会えないまま祖母は天国へと旅立ってしまいました。

私は祖母のことが大好きでした。でもそれを口に出せず祖母に伝えられていませんでした。私は今、祖母に伝えていなかったことをすごく後悔しています。一緒にいるその時その時を大切にできていなかったからです。当たり前前に祖母と会ったり、話したりしていた昔の自分を今はとてもうらやましく感じています。いつ何が起こるか、伝えられなくなるか分からないから自分の気持ちはその場でできるだけ伝えるようにする大切さを実感しました。悪い事をしたと気がついたときも、なるべく早くあやまり、笑顔で接し合う方が良いということを感じました。今まで頭の中で理解はしていたけれど、実際に行動で表すことはできず、今回祖母のことが起こり行動で表すことの大切さを学びました。これからは、後悔しないようにやさしく笑いながら話せる時間を大切にし、言いたいことはその場で言うということをしつかりと実senseできるようにしていきたいです。

そして、これからは私も祖母のように友人や家族に、そばにいただけで落ち着き、安心してもらえるような人に成長していきたいです。



つながれ！優しさのバトン

両国中学校 一年 宮本 隆之介

「お母さんに電話かけられる？」とお巡りさんが僕に言いました。僕は素直に自分の携帯電話から母の携帯電話への通話ボタンを押しました。数回のコール音ですぐ母は電話に出てくれました。「いきなりどうしたの？まだ公園で遊んでいい時間だよ。」と呑気な母の声がしました。僕は「警察の所にいます。」と言いました。母は「え？」と驚きの声を上げ僕は焦りました。お巡りさんが「電話を代わってくれる？」と僕に言いました。僕は悪いことをしたのではなく、公園で同じクラスの友達と遊んでいた時に財布を見つけ、交番に届けたのでした。むしろいいことをしたのです。僕が未成年なので「所有権」のことで保護者の承諾が必要だそうで、それでお巡りさんが保護者である母と連絡を取る必要があったのでした。拾った財布の中には、交通系ICカードと二千円が入っていました。財布を見つけた時、すぐさま交番に行こうと思ったのには理由があります。そ

れは以前、僕がキッズ携帯を落としてしまい、お巡りさんにとっても親切にしていたいただいた経験があるからです。

あれは今から二年前、僕が小学校五年生の時でした。学校から帰宅して遊びに行こうとして、自分のキッズ携帯がないことに気が付きました。仕事で不在の母にタブレットから連絡をして、母の仕事後に一緒に探す約束をしました。けれども、いてもたってもいられなくなり一人で家の近くを探しました。それでも見つかりませんでした。そこで家から見るところにある交番に、勇気を出して行ってみました。母よりも少し年上の優しそうなお巡りさんが対応してくれて、「昨晚キッズ携帯が落ちてし物としてこの交番に届いていること」、聞かれた個人情報から「それが僕のキッズ携帯であること」、「すでに交番にはなく警察署にあること」、「取りに行くには保護者と一緒に行くこと」を、説明してくれました。仕事が終わった母も合流して、警察署に行くことになりました。手続きをし、キッズ携帯は無事僕の手元に戻ってきました。するとそこに、勤務を終えた先程交番で対応してくれたお巡りさんが様子を見にわざわざ来てくださいました。

僕はこの経験がとても心に残っていて、次に自分が落とし物を見つけたら迷わず交番に届けようと思っていました。今回の交通系ICカードの落とし物は、特に日常生活でも使うことが多いので落としたら困ります。

みんなが、親切にしたりされたり、助けたり助けられる優しさのバトンが続いていくことで、よりよい社会になっていくと思います。知らない人との関わりによって、また自分自身にも優しさのバトンがつながるんだと思いました。

## ご年配の方に教わった大切なこと

錦糸中学校 一年 田中 陽介

私は人見知りで、人と話す時にとっても緊張してしまふ。あいさつなら意識してできるが、世間話となると苦手ではない。特に、あまりお互いのことを知らない人とあれこれ話すことに抵抗があった。

ある日、自宅マンションのエレベーターで一緒になったご年配の方が、唐突に話しかけてきた。

「もう中学生？最近どう？」

私のことを詳しく聞いてくる。ただでさえ人見知りで、しか

もその日ゆううつな気分だった私。よく知らない人との会話に乗り気にはなれず、当たり前障りのない返事ですませて、その場をやり過ぎした。

ところが、そのご年配の方と別れた後のことだ。なんだか温かい気持ちになっていることに気付いた。少し話しただけなのに、さっきまでのゆううつな気分が無くなり、ほんの少し心が軽くなっている。その方は、本物のおばあちゃんのように私を気に掛けて声をかけてくれた。それが私を元気にしてくれたのだと分かった。

マンションで声をかけてくれる方は他にもいる。共有ベンチに座っていて、そこを通って帰宅する子供全員に、いつも「おかえり。」と言ってくれる方だ。私も「ただいま。」と言いたいのだが、家族でもない人に対してそれは少しぞんざいで気まずい気がして、結局、会釈だけをしていた。

母に相談してみたところ、  
「ただいまだけの軽い感じで良いんだよ。何も言わないのが一番やってはいけないことだよ。」

と教えてくれた。私がしていた行動は、相手に失礼だったのだ。私は申し訳なく思った。

次の日早速、同じ方が「おかえり。」と言ってくださった時、

勇気を出して「ただいま。」と言ってみた。その方は、満面の笑みを浮かべてくれた。家族以外の人との「ただいま。」は不思議な気持ちになったが、それでもその触れ合いはとても気分が良かった。「あいさつはする方もされる方も良い気持ちになるものだ。」とこれまで何回も言われていたが、それを初めて実感することができた。

これらの出来事があってから、人とのコミュニケーションをより大切にしようと思えるようになった。お互いのことを知らないから話さないのではなく、知らないからこそ知るために会話をするので。ご年配の方に限らず、誰かから笑顔で話しかけられたら、私も笑顔で積極的に応えようと思う。嫌な気分の時も、誰かと笑い合って話せば嬉しい気分になることが分かったのだから、私がそれを実行することで、私以外の人にも同じ気持ちになってもらいたい。同じマンションのご年配の方から教えてもらった大切なことを、これから関わる人全てに明るく接することで伝えていきたいと思う。



## 家族の支え

文花中学校 一年 田崎 七菜

「人間誰しも、一人では生きていけない。誰かに支えてもらいながら生きていく。」そんな言葉の意味が、私は中学受験を通して、分かりました。

私が、中学受験をしようと思ったのは、六年生の十一月。塾に入って、お母さんと先生にやってみなと言われたのがきっかけでした。最初の頃は、あまり勉強が好きではなかった上、周りの受験をする子は、何年も前から勉強をしていて、自分がその子達に追いつけると思っていなかったもので、「落ちてもいいや」「受からなくても仕方ない」という気持ちでスタートしました。

けれど、勉強をしていく内に、だんだん気持ちが変わっていききました。授業の内容が分かって問題を解けたり、過去問を解いていくと点数が上がっていったりしていく内に、「志望校に受かるために、もっと勉強を頑張りたい」と強く思うようになり、「落ちてもいいや」という気持ちは消えていました。

だけど、周りの受験する子に追いつくためには、今の何倍も努力しなければなりませんでした。夜遅くまで勉強をする日々

が続き、時には涙が出て、受験を辞めようかなとも思いました。でも、そんな時に私を支えてくれたのが、家族でした。お母さんは、「頑張って。」と背中を押してくれたたり、落ち込んでいる時に抱きしめて、励ましたりしてくれました。お父さんは、お仕事で疲れているはずなのに、私分からないと言った所を、一緒に考えて教えてくれたり、悩みを聞いてくれたりしました。家族の支えがあったから、全力で勉強を頑張ることができました。

そして、受験当日。緊張している私に、お母さんが、

「いつも通り、頑張って来てね。」

と、言ってくれました。その言葉に私の緊張も少しほぐれ、「よし。頑張るぞ!」という気持ちになれば、自分の全力を出し切れました。

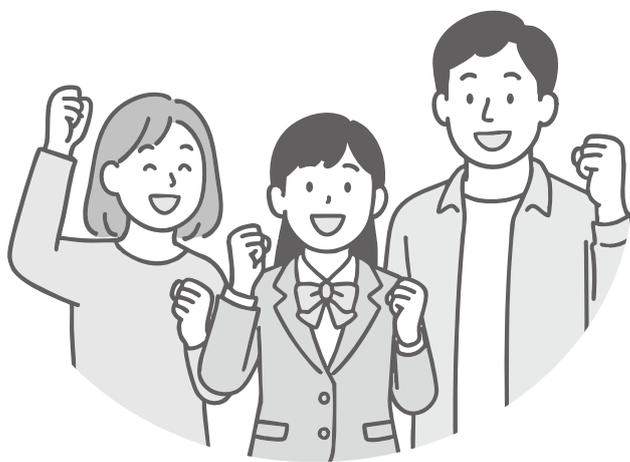
しかし、結果は不合格でした。合格発表の画面を見た時、とてもショックでした。そしてその数日後、補欠の連絡が届きました。私は、「もう少しだったんだ」「もうちょっと早く始めていれば合格できたのかもしれない」と、気持ちがあふれて、涙が止まりませんでした。でも、そんな私に家族は、

「頑張ったね。この頑張りは凄いことだよ。」

と言ってくれました。その言葉に、受験は終わってしまったけ

れど、私の心の中には、受験の合否よりも大切な、本気で勉強を頑張った誇りと、家族の温かさ、感謝の気持ちが残りしました。この日々は、大切な宝物です。

あの時、一人だったらすぐに諦めていたと思います。でも、家族が支えてくれたから、最後まで頑張ることが出来ました。だから今度は、家族が支えてくれたみたいに、私も誰かを支えられるようになりたいです。



初めの一步は笑顔から

両国中学校 二年 藤田 修丞

「話しかけてみよう、まずは小さな一歩から。」

その言葉を胸の中で繰り返しながら、私はホストファミリーの家のソファに座っていた。私はこの夏、区の海外派遣事業に参加しオーストラリアを訪れた。到着してから数時間も経たないうちに、目の前には知らない国の人々、耳には聞き慣れない英語が飛び交っている。

最初の数日は、ホストファミリーと過ごすことに慣れるのに必死だった。日本とは違うルールや習慣、言葉の使い方など、全てが新しい。日本語ならすぐに言葉が出てくるのに、英語となると少しの会話でも時間がかかる。自分の気持ちを上手に伝えられないもどかしさと、言葉が通用しない悔しきでいっぱいだった。

そんな私に変化をもたらしてくれたのが、バディだった。初日から「ランチ、一緒に食べよう!」と明るく声をかけてくれ、

友達の輪にも入れてくれた。休み時間には現地の友達が「お名前は?」「どこから来たの?」とたくさん話しかけてくれた。完璧には伝わらなかったかもしれない。それでも、最後まで聞いてくれて、私が何を言いたいのか一生懸命考えてくれた。たくさんの人と関わっていく中で、「間違えてもいいから話しかけてみよう」と思えるようになった。

ある日のランチタイムのこと。私は校庭のベンチに座って現地の友達が遊んでいるところを眺めていたが、気づくと友達が手を振りながら私を呼んでいた。なんだろうと思いつくと、「一緒にサッカーしよう!」と笑顔で誘ってくれた。その瞬間、私は「イエス!」と答えていた。言葉が理解できなくても、笑顔やジェスチャーで心が通じる瞬間が何度かあった。そのとき、「言葉の壁を超えても、人と人はつながれる」ということを肌で実感した。

帰国してから、私は人との距離の取り方が変わった。知らない人でも、まずは笑顔で挨拶をしようと思えるようになった。相手が外国の人でも、日本の人でも、言葉が通じても、通じなくても、気持ちはきつと届く。この経験は、私の中で大きな自

信となった。

今回の経験で学んだことは、挑戦は大きなことから始めなくてもいいということだ。笑顔一つ、挨拶一つでも新しい世界が広がると思う。そしてその一歩が、自分を成長させ、誰かとつながるきっかけになる。これからも私は、勇気を出して一歩踏み出し、たくさんの人と出会い、つながりを広げていきたい。

## 「また明日」から広がる輪

吾孀第二中学校 二年 高荷 祐羽

「また明日ね」この言葉がどれだけ私に寄りそい、私を変えてくれたのだろうと思います。私は今まで口にしてきたあいさつの中でとても心に残り、大好きな言葉があります。その言葉こそが「また明日ね」です。大好きな言葉となるきっかけはあの部活帰りの時でした。

私と友人の三人で帰りながら楽しくおしゃべりを続けていた時でした。私は友人二人と家の方角が異なっていることもあり、道を別れなければなりません。その時話が盛り上がっていたので私はもつと話したかったなと思っていました。すると別れる際に友人二人の方から私の名前が聞こえ、振り返ると

「また明日ね！」

と大きな声で手を振っている二人の姿がみえました。そして私もその場で

「うん、また明日ね！」

と返しました。私はそのとき、とても嬉しい気持ちになりました。それはその時、もつと話し続けられないことに寂しさを感じていたからだと思います。当時の私は何気ない言葉さえ気分が落ちこんでいる時にかげられるととても特別に感じられると思いました。

このことがきっかけで私は「また明日ね」という言葉が大好きになりました。

そしてこの出来事から、私に「また明日ね」と言って手を振ってくれた二人のようにあいさつで嬉しい気持ちになる人を増やしていこうと思いました。それから私はよりあいさつを大切にするようになりました。

初めは大勢の人にあいさつをすることに難しさを感じていました。私自身、もともとあいさつを好んで行うタイプではなかったのですが、初めの方は少し緊張してしまっていました。そのため、私は初めのうちは一人だけでもあいさつをしていこうと決めました。その時に一番気をつけたのは、ただ口で言うだけの

あいさつで終わらせないことです。あの時、嬉しい気持ちで「また明日ね」と返したように心を込めてあいさつをすることを大切にしました。

そこからは根気強くあいさつを続けていくことができました。そして今となった現在では登校時に会った友人や自分のクラスに入った時などに「おはよう」といったあいさつをしたり、何かしてもらった時には「ありがとう」と多くの人に向けて言うことができました。

これからもあいさつを繰り返してあの時のように気分の良い思いをする人が増えると嬉しいです。

## 素直になる勇氣

桜堤中学校 二年 金子 千桃

私は、中学二年生になってから、親に対する態度が悪くなっていたと思う。自分でも「これは言うてはいけない」「こんな言い方は良くない」と分かっているのに、感情に任せて言いすぎてしまうことが増えた。頭では理解していても、心がついていかないのだ。

ある日、私はお母さんと大きな喧嘩をしてしまった。納得で

きないことを感情のままにぶつけ、トゲのある言葉ばかり投げつけてしまった。本当は小さな不満が重なっただけなのに、そのときの私は止まれなかった。学校でのストレスや友達関係の不安、テストへの緊張などが心に積もり、爆発する場所を探していたのだと思う。

最初、お母さんは落ち着いた声で聞こうとしてくれていた。でも私が一方的に言い続けるうちに、お母さんの表情は曇り、最後には悲しそうに黙ってしまった。その顔を見た瞬間「また傷つけてしまった」と分かっていたのに、素直になれず意地を張ってしまった。

部屋に戻っても気持ちは収まらず、「なんであんなことを言っただろう」と自分を責めた。言っただ直後はスッキリしたように思えたのに、時間がたつほど後悔だけが残った。「ごめんなさい」と伝える場面を想像できても、実際に言葉にする勇気が出ない。そんな自分が嫌で、ますますモヤモヤした。

次の日の朝も気まずいまま学校へ行った。お母さんは普段通り「行ってらっしゃい」と言ってくれたのに、私は小さな声で「行ってきます」としか返せなかった。その背中を見送りながら、お母さんの気持ちを考えると胸が痛んだ。学校では友達と笑っていても、心のどこかでずっと引っかかっていた。

夜、私は勇気を出して「昨日はごめんね」と小さな声で伝えた。お母さんは驚いたように私を見て、それから優しく「分かったよ」と笑ってくれた。その一言で胸のつかえが消え、涙が出そうになったけれど、必死にこらえた。続けて「私も気持ちを伝えたいんだ」と言うと、お母さんは真剣に耳を傾けてくれた。私は学校でのストレスや友達との悩みを少しづつ話し、お母さんは「そうなんだね」と相づちを打ちながら聞いてくれた。その姿に「ちゃんと聞いてもらえている」と感じて安心できた。

そのとき分かったのは、私が本当に求めていたのは「分かってもらいたい」という気持ちだったことだ。怒鳴るより、落ち着いて言葉にした方がずっと伝わる。お母さんも「言ってくれば分かるのに」と笑ってくれて、胸がじんわりと温かくなった。

喧嘩をしても、私は結局お母さんに支えられている。これからも言いすぎてしまうことはあると思う。でもそのたびに立ち止り、「本当に伝えたいことは何か」を考えられる自分でいたい。



## 努力は孤独じゃない

本所中学校 三年 川又 葵

私は今年の五月、大好きな吹奏楽で人生が変わるかけがえのない体験をした。それは一つのコンサートだ。音楽をもっと好きになると同時に、努力することは決して孤独ではないと学んだ。この先どんなに辛いことがあっても、目標に向かう支えとなる私の宝物だ。

去年の冬、顧問の先生から声をかけられた。

「吹奏楽の絆コンサートに応募しないか。」

それは、東京中から実力のある中学生が集まって合同バンドを結成し、さらにプロのオーケストラと共演する、という夢のような話だった。まだ具体的なイメージが湧かなかった私は、ただわくわくしながら大好きなシンバルで応募をした。

そして春、幸運なことに出演が決まった。しかし、いざ決まると不安でしかなかった。東京中の実力者たちと自分が同じ舞台上で演奏できるのだろうか。考えるたびにプレッシャーを感じ

て怖くなった。それからは今まで以上に練習に精を出し、一人倍努力した。吹奏楽部の部員たちがいつも通り楽しく練習している中で、一人こんなに焦っている自分がどうしようもなく孤独だった。やめたくなくなった。それでも重たいシンバルを置いては持ち上げて、必死で最高の音を追い求めた。

中学生だけで行う事前練習会の日が来た。まずは合わせてみましょう、という指揮者の合図で、ついに合奏が始まった。

「素晴らしいですね。」

指揮者が指揮棒を下ろした。合奏は抜群に輝いていた。こんなに良い演奏をしたのは人生で初めて。私はそのとき気付いたみんな頑張って練習してきたんだ。今まで一人で練習してきたのか？いや、違う。住む場所はばらばらでも、絆の糸で繋がって、一緒に努力してきたんだ。そうでなければここまで良い演奏はできない。それぞれの努力が集まったからこそ素晴らしいものがつくれた。努力するとき、私はいつも誰かと繋がっている。

時は経ち、いざ本番。舞台は見たことのないほど光り輝いていた。胸いっぱい空気を吸って、夢の舞台とこの音楽を一生

忘れないように心に刻んだ。あの日の演奏は最高としか形容ができない。挑戦して、努力してよかったと心から思った瞬間だった。

この経験とそこから得た学びは、私の原動力となった。この先目標に向かって突き進む時にはいつも思い出したい。そして、一生の宝物としてずっと大切にしていきたい。

中学生最後の夏、最後の大会。私はどうしても金賞を取りたかった。けれど、本番が近づくとつれ、本当に取れるのだろうかかと怖くなった。そんなとき、五月の記憶が「努力は一人じゃない」とまた教えてくれた。部の仲間も、同じ目標に向かい一緒に努力している。そう思うと勇気が湧いて、今日も練習に励むことができる。もう孤独は感じない。あの日の思い出が今の私も支えてくれているから。

## 私の夢

吾嬬第二中学校 三年 白川 紗凪

私の夢は介護士になることだ。私のおばあちゃんは認知症だ。六年前のこと、私は父からある言葉を言われた。

「おばあちゃん認知症になったんだよ。」

そのときは事の重大さを分かっていなかった。自分の中で認知症は物忘れが多いだけだと思っていたからだ。けれど、その考えは違った。認知症には四段階の重度がある。私のおばあちゃんはその中の最高重度の認知症だ。

私はそんなおばあちゃんに会いに行つた。会ったとき何かいつもと違う雰囲気があったのを今でも覚えている。そして、おばあちゃんから衝撃的な言葉を言われた。

「あなたのお名前なんていうの。」

まるで初めて会った人のように言われたのだった。私は困惑することしかできなかった。私はおばあちゃんを知っているのに、おばあちゃんは私を知らなかった。だから、何をすればいいのか、何を話せばいいのかが初めての経験でよく分からなかった。そして、悲しかった。おばあちゃんと一緒に遊んだこと、一緒にごはんを食べたこと、沢山の思い出があるはずなのに自分がおばあちゃんの記憶の中から忘れられていることが悲しかったけれど、一番悲しいのはおばあちゃんだと思う。自分が忘れてしまっていることが分からない。忘れたくない思い出があっても覚えていない。だから、おばあちゃんが一番悲しいと思う。

そんなおばあちゃんと会ってなにをすればいいか分からない私にとって、父は輝いて見えた。父は本当にすごかった。自分

も忘れられていて悲しいはずなのに、沢山話しかけて自分ができてることをおばあちゃんのために率先して行動していたのだ。私はそんな父に憧れた。そして、私は介護士になりたいと思っただ。

認知症だけではなく、何か病気で体が思うように動かせないお年寄りのために少しでも役に立てられたらいいと思う。そして、高齢化の今を変えられるのは将来性に満ち溢れた私たちだと思う。だからこそ、今の現状に目を向けてみてほしい。そして、どんな病気を患っている人でも必ず人権があつて、自分の気持ちを持っていることを多くの人に知ってほしい。

## 人の心に触れられる人に

吾孀立花中学校 三年 井伊 陽希

「触れる」と「触る」。英語にすると、「どちらも「touch」と表す二つの言葉。私は夏期講習の国語で読んだ文章をきっかけに、この二つの言葉の違いを改めて考えました。その文章では「触れる」は相互的、「触る」は一方的であると述べられていました。例えば、傷口に「触れる」よりも傷口に「触る」の方が痛い感じがします。これは「触る」の方が一方的、つまり相

手のことを考えていないような意味合いを含むからだと推測できます。このことを人と関わる場面で考えた時、人の心に「触る」だと、一方的に心に踏み込んでいく感じがします。そのため、人とのつながりにおいては、人の心に「触る」のではなく、「触れる」ことが大切だと思いました。

私は吹奏楽部に所属していて、今年の一月にアンサンブルコンテストに出場しました。部員が三十五人いる中で、コンテストに出る生徒は八人。少人数だと一人一人の音の重要度が増すため、不安や緊張が大きく、練習であつても音が不安定で、きれいに出来ない時がありました。毎日練習を重ねるにつれて、音の出し方のコツをつかむことができ、アンサンブルでしか味わえない演奏の楽しさを味わうこともできました。しかし、もともと出しにくい「レ」の音が最後まで難しく、その音から始まる場面は、いつも大きなプレッシャーを感じていました。

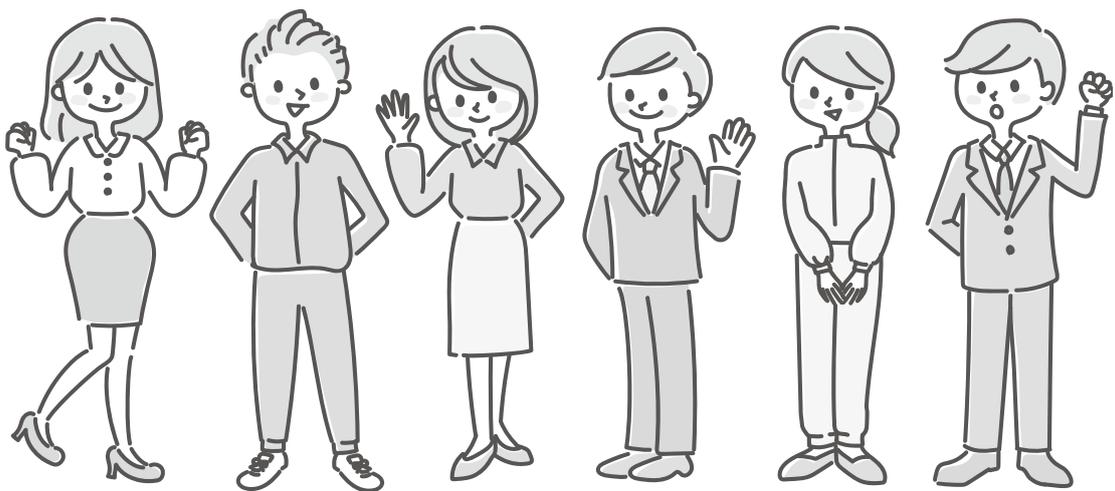
迎えた本番の日、会場入りする前に顧問の先生が、一人一人にメッセージ入りのカイロを渡してくれました。私がもらったカイロには、『「レ」大丈夫!』と書かれていて、練習での私の姿を褒めてくれる言葉もありました。そのメッセージを読んだ時、涙があふれてきて、安心感と嬉しい気持ちでいっぱいになりました。周りのメンバーも同じように泣いていました。今思

えば、先生のメッセージが私の心に「触れた」ことで、先生とのつながりを感じ、嬉しさや安心感を得ることができたのだと思います。

私はこの体験を思い出し、人の心に「触れる」ということは、相手のことを思っ言葉を選び、伝えることだと思いました。ただ、相手のことを思っ言葉選びは、相手を理解していないとできないことです。

先程の顧問の先生は、生徒の話をよく聞いてくれます。私も部活動の話や好きなことの話などをたくさんしてきました。練習や会話を通して、私たち一人一人の得意や苦手、感じ方や考え方を理解してくれているからこそ、私たちの心に「触れる」言葉を選び、私たちの心に届けてくれたのだと思います。

これから先、私には多くの人との出会いがあると思います。出会った人と良いつながりをもてるように、相手と接し、会話を重ねながら、少しずつでもその人のことを理解し、その人のための言葉選びができるようになっていきたいです。





佳  
作  
一  
覽



## 【小学校の部】

### ◎小学校1年生の部

スタンプリっぱいラジオたいそう	外手小学校	八木ヶ谷健仁
くまもとであったひと	二葉小学校	有村 匡
ほいくえんのともだち	錦糸小学校	鈴木 菜子
だいすきないところ	言問小学校	蘆田 麻友
わたしのおばあちゃん	小梅小学校	大森 柚希
なかよしきょうだい	柳島小学校	木原 梨那
きんじよのしよくぶつやさん	業平小学校	浅香凜太郎
ばあばはにんきもの	横川小学校	市川 絹紗
だいすきなおばあちゃん	菊川小学校	荒川 夏帆
ともだち100にんできるかな	第三吾孀小学校	佐藤 瑚心
しょうてんがいのあいさつ	第四吾孀小学校	森泉孝太郎
だかしやのおばちゃん	第一寺島小学校	福澤 七朋
ぼくのきもちはこのプレゼント	第二寺島小学校	石井 夏葵
たつきゅうやりたくない	中川小学校	吉田 佑
たいせつなごきんじよさん	押上小学校	大嶋 光莉
せいちようできるばしょ	八広小学校	鈴木 瑛介
ラジオたいそう	隅田小学校	高瀬 真希
かんきょうをよくしたい	梅若小学校	関 恵麻

### ◎小学校2年生の部

きょうかしあういつつこうさぎのきつさてん	緑小学校	近藤 映茉
赤ちゃんわたし	外手小学校	若菜 美羽
おばあちゃんへ、りょうりのプレゼント	二葉小学校	望月 芙実
ぼくにとつてのお母さん	錦糸小学校	森島 郁来
いつもやさしくえがおねえちゃん	中和小学校	根里 咲真
わたしの大すきなパパ	小梅小学校	神力 彩乃
クラスのみんなのために。	柳島小学校	山下 栞愛
だれにでもえがおで	業平小学校	松尾 幸月
ひいおばあちゃんの新ぼん	横川小学校	清田 彩月
やさしいおとうと	菊川小学校	永藪さくら
おじいちゃんの手	第三吾孀小学校	松本 周
けんどうきょうか月かん	第四吾孀小学校	柳原 橙道
ハハは十人きょうだい	第一寺島小学校	松山 凜
しんせつにしてもらったこと	第二寺島小学校	遊部 朔
ぼくのママ	曳舟小学校	島 駿斗
早く元気になってね	中川小学校	鈴木 遥太
ともだちとのたすけ合い	東吾孀小学校	川内 蒼清
つたえたいおもい	隅田小学校	榎本 愛凜
ぼくの家のおとなりさん	立花吾孀の森小学校	相沢 優
おばあちゃんとぼく	梅若小学校	森泉 快成

◎小学校3年生の部

妹に思っていること	外手小学校	寒川	光
夏休みの思い出	錦糸小学校	篠崎	希
3泊4日ラボサマーキャンプ	言問小学校	西館	一晟
ぼくのまわりの人たちのつながり	小梅小学校	相馬	悠人
地いきの人とふれ合う時	柳島小学校	星宮	朱里
わたしたちをつないでくれた花火大会	業平小学校	村岡	杏
たとえ仲がわるくても	両国小学校	吉田	怜
カンフーとぼく	横川小学校	小池峻太郎	
親友の引っ越し	菊川小学校	沈	蓉奈
やる気がでたよ！べん強に！	第四吾孀小学校	藍原由宇詩	
おばちゃんの見まもりたい	第一寺島小学校	岡村	啓助
やさしい人のこと	第二寺島小学校	廣澤	美晴
おばあちゃんといのちのつながり	第三寺島小学校	平野	朔杜
かぞくへのありがとう	曳舟小学校	矢野日奈子	
バスケットボールがつなぐ人とのきずな	中川小学校	塩澤	凜久
家ぞくにありがとうの手紙を書く	東吾孀小学校	鈴木陽向多	
ぼくのおじいちゃん	押上小学校	秋山	晴信
地いきの行事の大切さについて	八広小学校	望月	彩羽
八さい年下の妹	隅田小学校	山地あかり	
私の大事な家ぞく	立花吾孀の森小学校	高田彩未花	

◎小学校4年生の部

ぼくはお兄ちゃん	緑小学校	向阪	健
かんしゃをこめて	外手小学校	吉田	早希
人と人とのふれあいについて	二葉小学校	南	絵美梨
祖父母との時間	錦糸小学校	新津	玲奈
はじける夏	中和小学校	小池	智香
ぼくの町のよいところ	言問小学校	小野寺和馬	
学校生活を楽しくしてくれる友だち	小梅小学校	川嶋	杏和
人と人が協力し合う大切さ	柳島小学校	松原	孝平
がんばったピアノ発表会	横川小学校	具志堅	紬
大切なうそ	菊川小学校	木下	光
クラスに来てくれたお兄さんの三日間	第三吾孀小学校	渡辺	桃李
バラクラバ・ボーイとぼくの弟	第四吾孀小学校	藍原由季野	
ささえてくれた人たちへ	第一寺島小学校	中津	彩葉
先生ありがとう	中川小学校	五十嵐結衣	
地域での人のつながり	押上小学校	菅原	陽太
人と人とのつながり	八広小学校	斉藤	七桜
私の人生を変えた大切な人	隅田小学校	新原	栞奈
ぼくのあいさつひびかせ隊	立花吾孀の森小学校	加畑真那斗	
みんなで作るえん日	梅若小学校	山口ゆい乃	

◎小学校5年生の部

朝のラジオ体操	緑小学校	森	大和
助けてくれた友達	二葉小学校	飯倉	領太
仲間とつかんだJ.Oの切符	錦糸小学校	増田	真生
私の夢を支えてくれる人と本と歌	中和小学校	菅野	志帆
おじいちゃん、おばあちゃん	言問小学校	川船	嵩
わたしのお兄ちゃん	小梅小学校	小笠原	千花
笑顔がつなぐ心	柳島小学校	栗原	梨菜
笑顔のパワー	業平小学校	岡本	瑠美
新しい家族	横川小学校	鈴木	美結
大きらいなおばあちゃん	菊川小学校	三井	優智
地域のために	第三吾孀小学校	後藤	輝
後悔しないように	第一寺島小学校	船田	啓人
共に成長	第三寺島小学校	森岡	凜
あそびの大学	中川小学校	吉岡	紗希
未来へつなぐ	東吾孀小学校	島田	恵理奈
世界一やさしい私のおじいちゃん	押上小学校	秋山	ひなた
挨拶と感謝は笑顔の魔法	八広小学校	八巻	花楓
誰でも協力！助け合い！	隅田小学校	白井	聖隼
家族の大切さ	立花吾孀の森小学校	田村	雅
ぼくのまわりの人	梅若小学校	山崎	陸

◎小学校6年生の部

「人と人とのつながり」で大切なことは	外手小学校	峯村	寿志
背番号四番の決意！	二葉小学校	小野	遥琉
私だけのプラネタリウム	錦糸小学校	杉生	こいこ
太鼓と感謝の気持ち	中和小学校	齋藤	新
キャプテン	言問小学校	畠山	糸
わたしとおじいちゃん	小梅小学校	林	真央
みんなからの応援	柳島小学校	堀部	真未
マンションの緑の下さん	業平小学校	吉田	悠那
私の大好きな町	横川小学校	岩城	詩
人との関わりの大切さ	菊川小学校	前田	美優
ヘアドネーションで笑顔へ	第三吾孀小学校	田中	結唯
あいさつは心の栄養	第四吾孀小学校	北森	雄琉
廃品回収について知ってほしい	第二寺島小学校	大橋	美優
ボランティア活動	曳舟小学校	寺田	真麻
野球と努力と私	中川小学校	佐藤	誓
この作文を通して、心を見つめる	東吾孀小学校	田村	蒼空
僕に野球をありがとう	押上小学校	田口	惟士
人と人とのつながり	隅田小学校	岡田	航青
合宿で学んだこと	立花吾孀の森小学校	木下	心愛
花火がきれいに見える理由	梅若小学校	高木	梢

## 【中学校の部】

### ◎中学校1年生の部

僕の大切な家族  
優しいおばあちゃん  
毎日の小さなつながり  
祖父の笑顔  
挑戦、練習、努力  
曾祖父から学んだ感謝の気持ち

墨田中学校 清水 大登  
本所中学校 土屋 果凜  
吾孺第二中学校 金子 太郎  
寺島中学校 高山 恵花  
桜堤中学校 対崎 祐美  
吾孺立花中学校 池永 心桜

### ◎中学校3年生の部

北海道で体験したこと  
言葉の壁  
つまずいて気づく  
スマホより大切なもの  
たった一つのつながりで  
SNSに狂わされた子供達

墨田中学校 林 遼音  
両国中学校 國近 絢子  
豎川中学校 木谷 桃子  
錦糸中学校 犬童 心温  
寺島中学校 今井 惇晴  
文花中学校 浪川優稀人

### ◎中学校2年生の部

一言の大切さ  
私らしく、貴方らしく  
嫌いな人と向き合うとは  
親友  
パス  
想いをかたちに

墨田中学校 西風 花奏  
本所中学校 丸山 奏音  
豎川中学校 花川 寛暁  
錦糸中学校 ブダトキディリサ  
文花中学校 道山さくら  
吾孺立花中学校 我部 歩梨



## 人情味あふれる作品

「人情味あふれる下町すみだ」を思わせる作品が多く寄せられました。どの青少年健全育成作文からも、友情・家族愛・地域への思いが伝わり、審査員一同、温かな気持ちに包まれました。応募してくださった児童・生徒の皆さんに心より感謝いたします。

ここからは、各学年の作品について講評いたします。小学校1年生「わたしとママのないしょのじかん」は、四人兄弟の世話で忙しい母親が、自分だけのために時間をつくってくれる喜びを素直に表現しており、母親からの愛情を受けて感じる「幸福感」がよく伝わってきました。2年生「ながなわの思い出」では、クラス全員で長縄の最高記録に挑む過程が生き生きと描かれています。仲間と協力しながら目標を達成する姿に心を打たれました。3年生「大好きなお父さん」は、父親が自分の名前に込めた「三つの願い」を受け止め、「幸せに、美しく生きていく人」になろうとする強い決意が感じられます。夢に向かって歩む姿に胸が熱くなりました。4年生「心に虹をかけよう」は、突然の雨の中で友達が荷物を持ってくれた出来事をきっかけに、友情について深く考えた作品です。「相手の心に虹をかけよう」と、周囲を喜ばせる行動を大切にしようとする前向きな姿勢が印象的でした。5年生「話せなかった自分」は、家ではおしゃべりなのに学校では話せなかった自分が、どのようにそのつらい時期を乗り越えたのが丁寧に綴られています。そのままの自分を受け入れてくれた周囲への感謝があふれる作品でした。6年生「盆踊りから始まる人とのふれあい」は、かき氷の提供を手伝った経験から、人とのつながりやチームワーク、思いやりの大切さに気付いていく姿が描かれています。地域で暮らすうえで欠かせない信頼関係を意識し、リアルなふれあいを大切にする意欲が伝わってきました。中学1年生「楽しいお祭りの思い出」は、母親が夏祭りの準備をする姿を通して、地域の祭りが多くの人の善意によって支えられていることを実感していきます。地域の人々への感謝を深め、自分も人を喜ばせる存在になりたいという決意が印象的でした。2年生「今より明るい世界を」は、特別支援学校との交流を通して、自分の中にあつた障害のある人への偏見に気付き、同じ一人の人間として向き合う大切さを学んだ作品です。そこから、自分にできることを考え、共生社会の実現へ思いを寄せる姿勢に、力強さと優しさを感じました。3年生「あの子の勇気を受けとって」は、教室に入りづらかった時期に、家族やクラスメイトの思いやりに支えられた経験が綴られています。思いやりをもった人と人とのふれあいをこそが、前に進む力になることを改めて教えてくれました。

結びに、区内各地域で青少年健全育成活動にご尽力いただいている皆様、そして本コンクール開催にあたりご協力いただいた関係団体の皆様に深く感謝申し上げます。

墨田区立中学校教育研究会 国語・書写部長

墨田区立吾嬭立花中学校長

河野敏也

# 令和七年度青少年健全育成作文コンクール審査員一覧

(敬称略)

小澤裕二	小野俊一	松永亜樹	橋本亮	早川和宏	長谷川豊	市川清	堀口義晃	坂井正廣	小林厚子	阿部修三	山口仁美	白石祐一	西村紀子
墨田区少年団体連合会会長	墨田区青少年委員協議会会長	墨田区立中学校PTA連合会会長	墨田区立小学校PTA協議会会長	吾孺立花中地区青少年育成委員会委員長	桜堤中地区青少年育成委員会委員長	文花中地区青少年育成委員会委員長	寺中地区青少年育成委員会委員長	吾孺二中地区青少年育成委員会委員長	錦中地区青少年育成委員会委員長	豎中地区青少年育成委員会委員長	両中地区青少年育成委員会委員長	本中地区青少年育成委員会委員長	墨中地区青少年育成委員会委員長
小学3年	小学1年	中学2年	小学4年	小学3年	中学3年	中学1年	小学5年	小学2年	中学2年	小学1年	中学1年	小学6年	小学4年

河野敏也	清水雅也	加藤才智	小川政美	野口清志	坂東江美	明石由美	泉和典	畠山恵美子	田渕マチ子	櫻井陽子	佐藤亮	山田勇平
墨田区立吾孺立花中学校校長	墨田区立第四吾孺小学校校長	墨田区青少年委員協議会	吾孺立花中地区青少年育成委員会	桜堤中地区青少年育成委員会	文花中地区青少年育成委員会	寺中地区青少年育成委員会	吾孺二中地区青少年育成委員会	錦中地区青少年育成委員会	豎中地区青少年育成委員会	両中地区青少年育成委員会	本中地区青少年育成委員会	墨中地区青少年育成委員会
中学3年	小学6年	小学5年	小学1年	小学4年	小学3年	中学2年	中学1年	小学2年	小学5年	小学6年	中学3年	小学2年

令和 8 年 3 月

墨田区教育委員会事務局  
地域教育支援課地域教育支援担当

〒130-8640 墨田区吾妻橋 1-23-20  
電話 03 (5608) 6503



ひと、つながる。  
墨田区